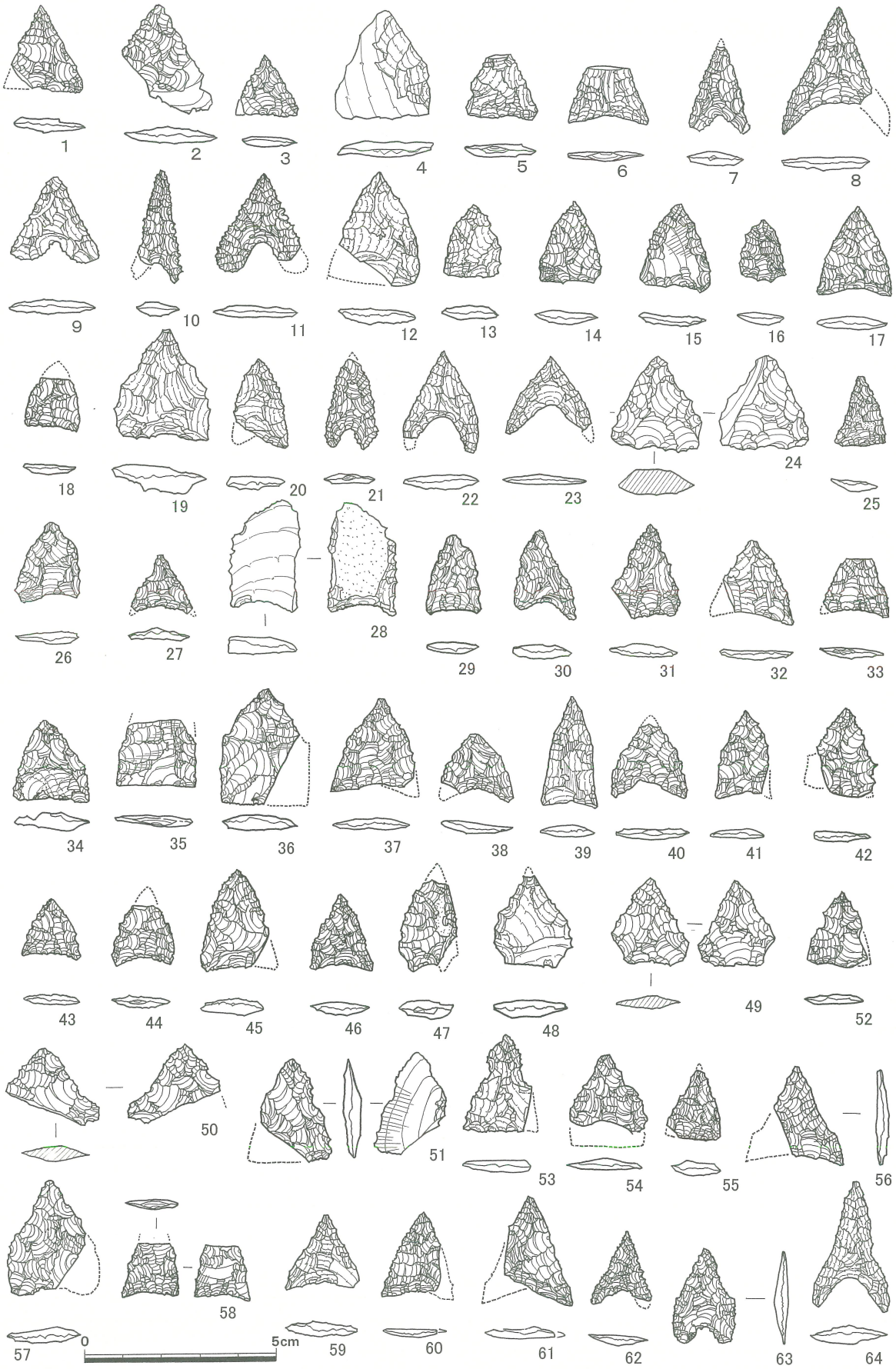


第69図　石器実測図１（１～64）（Ｓ－2/3）

の調整手法は６Ｃ類に類例が認められる。

５Ａ類…31

31は不透明な灰黒色黒曜石剥片を素材にやや荒い平坦剥離によって調整・整形している。主要剥離面に素材面を残している。左脚部は欠損している。

５Ｂ類…32・33

32は安山岩を素材にしている。図は背面であるが全体を平坦剥離で調整・整形していて主要剥離面には素材面を大きく残している。左脚部は欠損している。33は不透明な灰黒色黒曜石剥片を素材にし、平坦剥離によって整形しているが主要剥離面には素材面を残している。左脚先端と体幹先端は欠損している。

６Ａ類…34～36

34は線状の縞が入る漆黒黒曜石剥片を素材にしている。表裏ともに素材面を残さないよう平坦剥離によって整形するが調整はやや荒い。35は透明感ある良質の黒色黒曜石剥片を素材にしている。全体に平坦剥離によって整形するが主要剥離面に素材面を残す。体幹先端を大きく欠損する。36は漆黒良質黒曜石の薄手で幅広な剥片を素材にして平坦剥離によって調整・整形する。表裏ともにわずかに素材面を残している。右脚部は欠損している。

６Ｃ類…37～41

37は透明感がある良質の黒曜石で薄い剥片を素材にし、表裏共入念な平坦剥離で調整し、素材面を残さず整形されている。右脚部は欠損している。38の素材は灰黒色黒曜石の極く薄い剥片である。平坦剥離によって整形しているが素材によるのかステップ気味に終わっている。左脚部は欠損している。39は安山岩の薄い剥片を素材に表裏とも平坦剥離で調整・整形する。基部に寄った部分の表裏に局部磨製が施されている。６Ｃ類に分類したが11Ｂ類の範疇とも考えられる。40の素材は透明感のある良質の黒曜石である。体幹先端は図の裏側への加圧により折損している。41の素材も透明感のある良質の黒曜石である。主要剥離面が識別できないほど平坦剥離を施している。右脚部は欠損している。6類に分類した中で35・36・41は駒形鏃で縄文晩期を特徴づけるものであろうか。

７Ａ類…42

42は透明感のある良質の黒曜石で、薄手の剥片を素材にしている。左脚部は背面からの加圧により折損している。

７Ｂ類…43～46

43は灰色黒曜石を素材に平坦剥離を施し、右側縁は細かい剥離によって整形している。今回出土した石鏃では小型の部類である。44は表裏とも平坦剥離で調整・整形するが、主要剥離面に素材面をわずかに残している。体幹先端は主要剥離面からの加圧により欠損している。45は灰黒色黒曜石を素材にし表裏ともに素材面を残さないよう調整・整形する。図は背面であるが体幹左側縁中心付近より体幹右下への剥離は主要剥離面まで達しており、脚部は作出されていない。46は透明感のある良質黒曜石を素材にしており、図の裏面が主要剥離面であるが素材面

は残していない。

８Ｅ類…47

47は黒色黒曜石を素材に背面は一部に素材の自然面を残し、主要剥離面も大きく素材面を残している。体幹先端と右脚部は主要剥離面からの加圧により欠損している。

９Ａ類…48

48は安山岩の横広剥片を素材に表裏ともに周縁よりわずかに調整を施し整形する。基部に自然面を残している。

10Ａ類…49～55・76

49は灰色黒曜石を素材にして表裏ともやや荒い平坦剥離によって調整を施し整形している。平基式である。50は33号支石墓（ＳＡ６）の撹乱を受けた石棺の埋土からの出土である。嬉野椎葉川産黒曜石を用い、有肩式の形態である。51は縞模様が入る透明度の高い黒曜石横広剥片を素材にして主要剥離面から背面へのみの剥離により調整を施す。右縁の抉り状部分も同様である。背面からの加圧により体幹中位から左脚部にかけて折損している。52は透明感のある黒曜石を素材にしてやや荒い調整により整形されている。左縁の一部と右脚部は欠損している。53は安山岩を素材に平坦剥離により調整・整形する。側縁の抉りも平坦剥離によるもので形状は石匙状であるが石鏃である。54は透明感があり縞模様がはいる黒曜石を素材に平坦剥離によって調整・整形している。背面からの加圧により体幹下半分が欠損しているため基部の整形は不明であるが切損部に残る調整からみて一応ここに分類した。55の素材は54に似る。表裏の調整はわずかに素材面を残して整形している。体幹先端と左脚部先端を欠損である。76は灰色黒曜石の薄手剥片を素材にして、剥片の末端に平坦剥離による調整を加えて整形している。体幹先端部と両脚部先端は欠損である。

10Ｂ類…56～59

56は７－9トレンチのピット1から出土した。安山岩に近い石質の黒曜石を素材にして表裏を平坦剥離によって調整・整形している。左縁から基部中心にかけて左脚部を大きく欠損している。57は透明感ある良質の黒曜石を素材にして表裏とも平坦剥離によって調整・整形している。右脚部を欠損している。58は44号支石墓（ＳＢ15）の内部主体の土壙からの出土である。漆黒良質の黒曜石剥片を素材にしている。図は背面であるが周縁より全面剥離によって調整し、裏面の主要剥離面は周縁のみに細かい調整を加え、主要剥離面を残して整形している。体幹先端部は欠損である。59の素材は安山岩剥片である。表裏を平坦剥離で調整・整形する。右脚部に素材面を残している。右脚先端部は欠損である。

10Ｃ類…60・61

60は透明度がある黒曜石で薄手の良質剥片を素材にしている。右側縁から脚部にかけて大きく欠損し、裏面主要剥離面には素材面を残している。61は薄茶色半透明の黒曜石を素材に表裏とも大きな平坦剥離を施し整形している。右脚部を欠損している。

10Ｄ類…62・63

62は良質黒曜石を素材に表裏とも細かい剥離によって調整・整形する。右脚先端部を欠損している。63は漆黒黒曜石を素材にして表裏とも丁寧な平坦剥離によって調整・整形された端正な有肩石鏃である。

10Ｅ類…64

64はやや身幅狭く長めの体幹に開脚した脚部を備える特徴的な形態を示す

13Ａ類…65～67

65は漆黒黒曜石の薄い剥片を素材にして剥離を加え体幹に比し基部の幅が長い半月形に整形している。体幹先端部はわずかに尖らせている。66は65と同類であるが体幹がやや長いものである。67は透明感のある黒曜石を素材にして表裏ともに平坦剥離で調整し素材面を残さずに整形している。体幹先端部をわずかに尖らせているところは前２点と同じであるが肩が張るなど形は長方形に近い整形である。

13Ｂ類…68～70

68の素材は漆黒黒曜石である。体幹先端部は表裏からそれぞれに平坦剥離を加えることにより作出され、側縁は右縁を主要剥離面から、左縁を背面からの傾斜剥離によって調整されている。従って体幹の上面観は左右が交差していて、他に見られない調整手法である。69は不透明灰色黒曜石を素材に表裏ともに平坦剥離によって調整・整形している。70は透明感のある黒曜石を素材にして、主要剥離面は平坦剥離により、背面は傾斜剥離によって調整・整形している。

13Ｅ類…71

71の素材は透明感のある黒曜石で、薄手の剥片である。主要剥離面は図の裏面になるが、打面を上にし、体幹先端部付近は平坦剥離によって調整・整形している。凹基部は細かい傾斜剥離によって調整・整形している。従って大きく素材面が残る。背面はほぼ全体を細かい調整によって整形している。左脚部は欠損している。

14Ｂ類…72～74

72は灰黒色黒曜石を素材にしている。表裏とも丁寧な平坦剥離によって整形し、素材面を残さない。右脚部はわずかに欠損している。基部はわずかに凹基であり、体幹先端部の調整は尖らせず整形していて直線状である。73の素材は透明感のある灰色黒曜石である。72と同じ直剪鏃であるが両側縁は外へやや膨らむ形状である。主要剥離面に素材面を残している。74の素材は灰黒色黒曜石で、73の体幹が低い形状の直剪鏃である。

石鏃未製品（第70図75～77、第27表、図版75）

75は透明感のある良質黒曜石を素材にしている。背面は傾斜剥離によって調整している。主要剥離面は下位からの平坦剥離で調整している。体幹側面に２条の樋状剥離が施され、この調整は素材の側縁から押圧剥離を加えるために行われる石鏃製作工程の一つと考えられる。従って石鏃未製品と推定している。76は灰色黒曜石の薄手剥片を素材にして、剥片の末端に平坦剥離による調整を加えて整形している。10Ａタイプに属すると思われるが体幹先端部と両脚部先端の欠損のため定かでない。77は原面が打面の石核から剥取された横広で厚手の剥片を素材に

第70図　石器実測図２（65～96）（Ｓ－2/3）

している。右縁及び体幹部を薄くするために階段状剥離で調整を行っている。石鏃製作工程の途中で未製品と思われる。今回の調査によって出土した石鏃未製品は３例である。

トロトロ石器（第70図78～87、第27表、図版75・76）

トロトロ石器として図示したが、本来、トロトロ石器の形態は、体幹先端部に丸みをもつものが多いが、平らなものや尖ったものもあり、体幹の表裏や縁辺に磨痕が見られ、トロトロとした肌ざわりとやや鈍い光沢がみられる。脚部は先端が丸みをもつか、角ばった小突起状でやや開き、両脚は多くの場合、非対称となっているとされているが、（注３）ここでは、形態的に石鏃に類するもので石器の製作作業工程が石鏃とは相違するもの及び石鏃のところで示した石鏃の分類に属さないものを挙げた。

78は光沢のある漆黒黒曜石の剥片を素材にしている。下端から先端に向けて施された樋状剥離が主要剥離面に達している。先端は尖らず直剪状である。細調整は全て主要剥離面から行う急傾斜剥離によって整形している。79は漆黒黒曜石の剥片を素材にしている。平坦剥離のみによって調整し、先端は折損したものでなく薄く収め、そこに３回の加撃により直剪状の先端を形成している。主要剥離面に素材面の一部を残している。80は輝度が低い灰黒色黒曜石の剥片が素材である。調整手法は78とほぼ同じであるが主要剥離面の体幹調整を平坦剥離によって行う点が相違している。81は良質黒曜石の剥片を素材にして背面は丁寧な平坦剥離と傾斜剥離によって調整している。正面は背面の細調整をし易くする為に背面より早く平坦剥離による鱗状の細部調整が行われ、全体に入念な調整で整形している。82は輝度のある漆黒黒曜石の剥片を素材にしている。調整手法はほぼ80と同じであるが表裏とも平坦剥離で調整し主要剥離面に一部素材面を残して整形している。先端部の細調整は見られない。83は透明感のある良質黒曜石の剥片を素材にしている。ｂ面の主要剥離面を平坦剥離によって調整を加えた後にａ面の背面に向けて傾斜剥離を施して整形している。主要剥離面には一部素材面を残している。84は漆黒黒曜石の剥片を素材にしている。ｂ面の主要剥離面を平坦剥離によって調整を加えた後にａ面の背面に向けてほぼ周縁全体に急傾斜剥離によって調整・整形する。85・86は漆黒黒曜石を素材にし、共に表裏を平坦剥離によって調整・整形する。85は背面にわずかに自然面を残していて、２点とも背面からの加圧により欠損している。87は良質黒曜石の剥片を素材にして、表裏を平坦剥離によって調整し、先端部は丸みを帯びて整形している。主要剥離面には一部素材面を残している。形態は石鏃に近いものであるが全体に手法が荒く石鏃とは異質である。

尖頭器・石槍（第70図88～95、第27表、図版76）

88は灰色黒曜石剥片を素材にした三稜尖頭器である。ａ面は稜線状からの調整であり、ｂ面は両側縁からの調整によって整形している。全体に風化が進んでいて上半部と基部を欠損している。89は安山岩の分厚い剥片を素材にした断面が凸レンズ状の短直な石槍である。風化が進んでいる。90は安山岩の剥片を素材にして周辺を調整して整形し、裏面に主要剥離面を残している。体幹はやや厚く、基部は折損ではなく打面を残している。ここでとりあげているが石鏃分類タイプ02Ａ平基式の石鏃に近い形態を示し、弥生期の石鏃であろう。34号支石墓（ＳＡ７）

の破壊された石棺の埋土から出土した。91は安山岩の分厚い細長剥片を素材にした石槍である。風化が激しく左縁に自然面を残すが先端部と基部の調整は不鮮明である。主要剥離面からの加圧により折損している。92は安山岩の分厚い縦長剥片を素材にした尖頭器である。打瘤付近は体幹下方の厚みを減じる為に剥離調整を何回も執拗に繰り返し行っている。全体に風化が進んでいる。93はサヌカイト質安山岩の厚みがある剥片を素材にしている。石槍として作成されたものであるが先端部が折損した後に先端を再調整して再利用している。94は安山岩の剥片を素材にした短直な小形の石槍である。表裏を丁寧に剥離調整して整形する。基部と先端部を欠損し、全体に風化が進んでいる。95は安山岩の剥片を素材にした小型の石槍である。表裏を剥離調整・整形している。打面は下方と推定され、風化が激しく先端部は欠損している。

抉入り石器（第71図97～103、第27表、図版76）

97は輝度が高い黒曜石の点状打面を持つ縦長剥片を素材にしている。剥片下端に主要剥離面から急傾斜剥離による調整を施し、凹刃部を形成している。98は不純物を多く含む漆黒黒曜石の縦長剥片を素材にしている。体幹中位の上下に主要剥離面及び背面に渡って凹刃部を形成している。背面の稜は磨り潰している。刃部は使用による磨滅が著しい。99の素材は漆黒黒曜石の薄い剥片である。表裏に外縁よりの剥離調整を施し、湾曲した三日月形に整形している。内縁に３カ所の凹刃部を施刃しているが刃部に使用の為と思われる著しい潰れが認められる。100は透明感のある良質黒曜石の不整形な剥片を素材にしている。剥片の両縁に一方は丸く、他方は湾曲状に主要剥離面から施刃している。101は透明感のある良質黒曜石の縦長剥片を素材にしている。側縁に背面からの調製により凹刃部を形成している。102は漆黒黒曜石の不定形剥片に弧状に施刃している。103は漆黒黒曜石のやや縦長剥片を素材にしている。上部の打瘤付近は背面側から急傾斜剥離を施し、両側縁は主要剥離面側から急傾斜剥離を施している。湾曲する刃部は背面から施刃している。刃部と両側縁に使用による磨滅が認められる。

掻器（第70図96・第71図104～106、第27表、図版76）

96は漆黒黒曜石のやや横広な剥片を素材にしている。打面部は背面から、尾部は主要剥離面からそれぞれ急傾斜剥離によって施刃する。背面には左方からの平坦剥離が認められる。原ノ辻型台形石器風であるが両刃を持つ掻器として捉えた。104は白い小さな不純物を含む黒曜石を素材にし、刃部は主要剥離面から施刃している。105は黒色良質の黒曜石剥片を素材にしている。パティナは古く、主要剥離面に2カ所の打瘤があるが切り合いは認められず１回の剥離と思われ、下方に主要剥離面側から施刃している。106は不純物を含む黒曜石で自然面を多く残す縦長の分厚い剥片を素材にしている。先端を折り取り、その部分に主要剥離面からの急傾斜剥離によって施刃している。

削器（第71・72図107～115、第27表、図版76・77）

107は細い縞模様の入った透明感のある黒曜石小剥片を素材にしている。主要剥離面の右縁に細かい急角度の調整を施して施刃している。108はサヌカイト質安山岩の厚い剥片を素材にしている。刃部は主要剥離面側を敲打によって厚みを減らし、背面にかけて施刃している。109

第71図　石器実測図３（97～112）（Ｓ－2/3）

は安山岩の分厚い横長剥片を素材にしている。打面部を除く３カ所に、左縁、右縁は主要剥離面のみに、下端は表裏から施刃している。110は安山岩の自然打面から剥取したやや縦長剥片を素材にしている。素材を横位に使い、下縁に主要剥離面から再調整を施して施刃している。111は安山岩石核の残核を利用した削器である。主要剥離面のａ及びｃの部分は急傾斜剥離によって調整し、ｂの部分は厚みを減じるように階段状剥離によって調整し、背面は平坦剥離によって調整している。112は安山岩のやや大振りの剥片を素材にして、剥片の尾部に主要剥離面から施刃している。113は漆黒黒曜石で調整打面から剥取した縦長剥片を素材にしている。周縁に細かい急傾斜の調整を施している。114は灰黒色黒曜石の横長剥片を素材にしている。素材の両端を折り取ってから施刃している。Ｄ地点７－９トレンチ、ピット２から出土した。115は輝度のある漆黒黒曜石の狭小な調整打面から剥取したやや横広剥片を素材にしている。剥片下部を背面から折り取りそこに施刃している。その部分の主要剥離面には打損じの痕跡を残している。

彫器（第72図116・117、第27表、図版77）

116は漆黒黒曜石の縦長剥片を素材にしている。打面部に２回と尾部に１回の樋状剥離を施している。117は安山岩の不定形剥片を素材にしている。ｂ面下部に高まりのある円形の自然面を残しており彫器とするには躊躇いがある。Ｅ地点３－30トレンチ52号支石墓（ＳＢ12）内部主体土壙の下部から出土した。

石錐（第72図118～121、第27表、図版77）

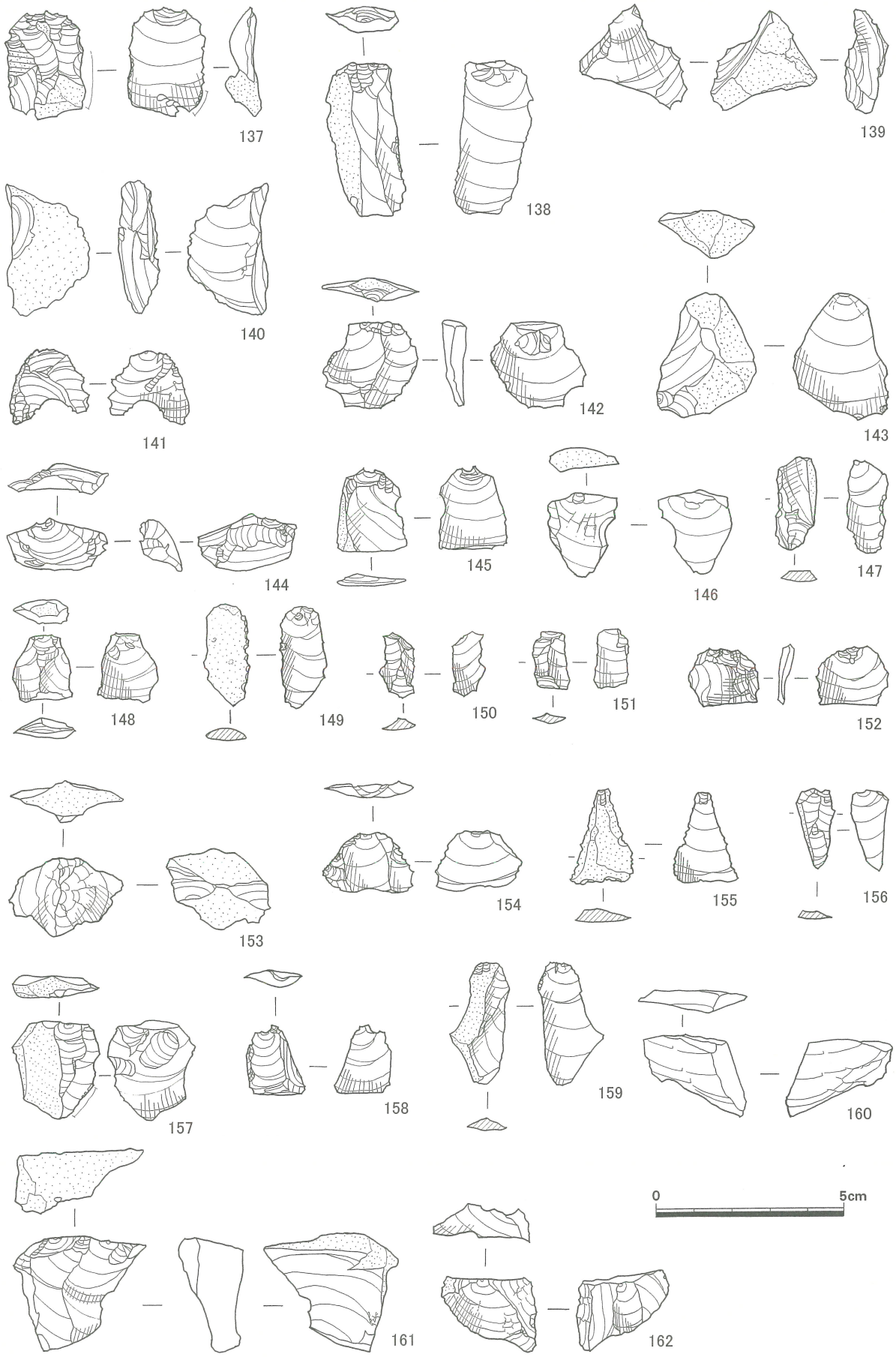
118の素材は安山岩の剥片であり、石鏃製作の手法と同じような押圧剥離で表裏ともに素材面を残さず調整・整形している。錐部の断面は菱形を呈している。119は安山岩の薄い剥片を素材にしている。石鏃製作の手法と同じ平坦剥離調整に近い調整をしている。錐部の断面は菱形を呈している。120は灰色黒曜石の不定形剥片を素材にしている。主要剥離面からの傾斜剥離で調整・整形している。錐部の断面は三角形状を呈する。121は輝度が高く透明感のある黒曜石剥片を素材にしている。錐部の先端は三角形状に尖らせ、断面も三角形を呈している。

剥片、使用痕のある剥片（第72・73図122～152・154～160、第27表、図版77～79）

122は調整打面から剥取された透明感のある良質黒曜石の剥片である。左縁に使用痕を残している。Ｄ地点５－４トレンチ33号支石墓（ＳＡ６）の撹乱を受けた棺内埋土から出土した。123は背面に自然面を残す黒曜石の剥片である。角礫から分厚く剥取し、右方からの加撃で半分程に切断し打面を設けている。石核の素材となる剥片である。Ｄ地点７－９トレンチピット1から出土した。124は調整打面から剥取された漆黒良質黒曜石の剥片である。背面にパティナの古い面が残っており旧石器の再利用剥片と思われる。Ｄ地点５－４トレンチ34号支石墓（ＳＡ７）の破壊された石棺の埋土から出土した。125は自然打面から剥取された白色不純物を含む灰黒色黒曜石の剥片である。背面に1枚の剥離面を残している。Ｄ地点５－４トレンチ35号支石墓（ＳＡ８）棺内埋土の下層で出土した。126は調整打面から剥取された透明感がある漆黒黒曜石の幅広の剥片である。背面に３枚の剥離面を残している。Ｄ地点８－５トレンチ44号

第72図　石器実測図４（113～136）（Ｓ－2/3）

支石墓（ＳＢ15）主体部土壙から出土した。127は大きく自然面を残す漆黒黒曜石の剥片である。右側縁に顕著な刃こぼれ状の使用痕が認められる。Ａ地点２－33トレンチ22号支石墓（ＳＢ３）主体部土壙周辺から出土した。128は灰色黒曜石の小型剥片である。背面に剥離痕を留めているが本例を剥取する以前の古いものである。左側縁にわずかに刃こぼれ様の使用痕を残している。Ｄ地点５－５トレンチ51号支石墓（ＳＢ23）土壙埋土の中位から出土した。129は透明感ある黒曜石の剥片である。側縁に鱗状の剥離を認め打面再生剥片かと思われる。Ｄ地点８－６ピット１から出土した。130は透明感ある黒曜石の剥片である。打面部は背面からの加撃で取り除いている。右縁及び下位の湾曲部に使用痕を残している。Ｄ地点７－９トレンチ38号支石墓（ＳＢ４）内部主体の土壙から出土した。131は良質の黒曜石剥片である。右縁に僅かな刃こぼれ状の使用痕を残している。132は極小の打面から剥取された輝度が高い漆黒黒曜石の断面三角形を呈する剥片である。背面に大きく自然面を残している。Ａ地点２－33トレンチ22号支石墓（ＳＢ３）内部主体の土壙周辺から出土した。133は縞模様が入った黒曜石の剥片である。背面に大きく自然面を残し、また２枚の剥離痕を留めている。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12から出土した。134は狭小な未調整打面から剥取された透明で縞模様がある黒色黒曜石の剥片である。左縁中位から下位にかけて繊細な刃潰れ状の使用痕を残している。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12から出土した。135は背面に自然面を大きく残す漆黒黒曜石の剥片である。右側縁に使用痕を残している。Ｅ地点３－30トレンチ52号支石墓（ＳＢ12）主体部土壙から出土した。136は自然打面から剥取された細かい縞模様の透明感がある黒曜石の剥片である。右縁に使用痕を認める。137は小さな白色不純物を含む黒曜石の剥片である。打面は剥取されている。背面に剥離痕を留め、下方に自然面を残している。両側縁の下方に使用痕を残している。138は細かい縞模様が入り透明感がある黒曜石の縦長剥片である。背面に２枚の剥離痕を留めている。139、140はＤ地点３－24トレンチ42号支石墓（ＳＢ11）内部主体の土壙から出土した。139は自然打面から剥取された漆黒黒曜石の剥片である。背面側から切断して素材としている。140は漆黒黒曜石の剥片である。先端部は彫器風で鋭いが樋状剥離とは異なっている。背面から切断した後に先端部に２方向から加撃している。141は縞模様が入り透明度のある黒曜石の剥片である。Ｄ地点５－10トレンチ遺構13ピット12から出土した。142は調整打面から剥取された透明感がある輝度の高い漆黒黒曜石の剥片である。表裏面に微細な刃こぼれ様の使用痕を残している。Ｄ地点８－５トレンチ44号支石墓（ＳＢ15）内部主体の土壙から出土した。同じ支石墓から出土した126とは同一母岩から剥取された剥片であるが直接の接合関係はない。143は自然打面から剥取された黒曜石の剥片である。背面には大きく自然面が残り、本例を剥取する以前の古い剥離痕１枚が認められる。144は不透明な灰黒色黒曜石の横長剥片である。丸く小さな打面を留めている。145はやや透明感がある黒曜石の剥片である。背面から尾部を切断している。146は自然打面から剥取された、不透明な灰色黒曜石の剥片である。147は透明感がある漆黒黒曜石の剥片である。背面に被熱による薄茶色の変色が見られる。主要剥離面の左側縁に刃こぼれ様の使用痕を残している。Ｂ地点28号支石墓（ＳＡ１）棺内埋土からの出土であ



第73図　石器実測図５（137～162）（Ｓ－2/3）

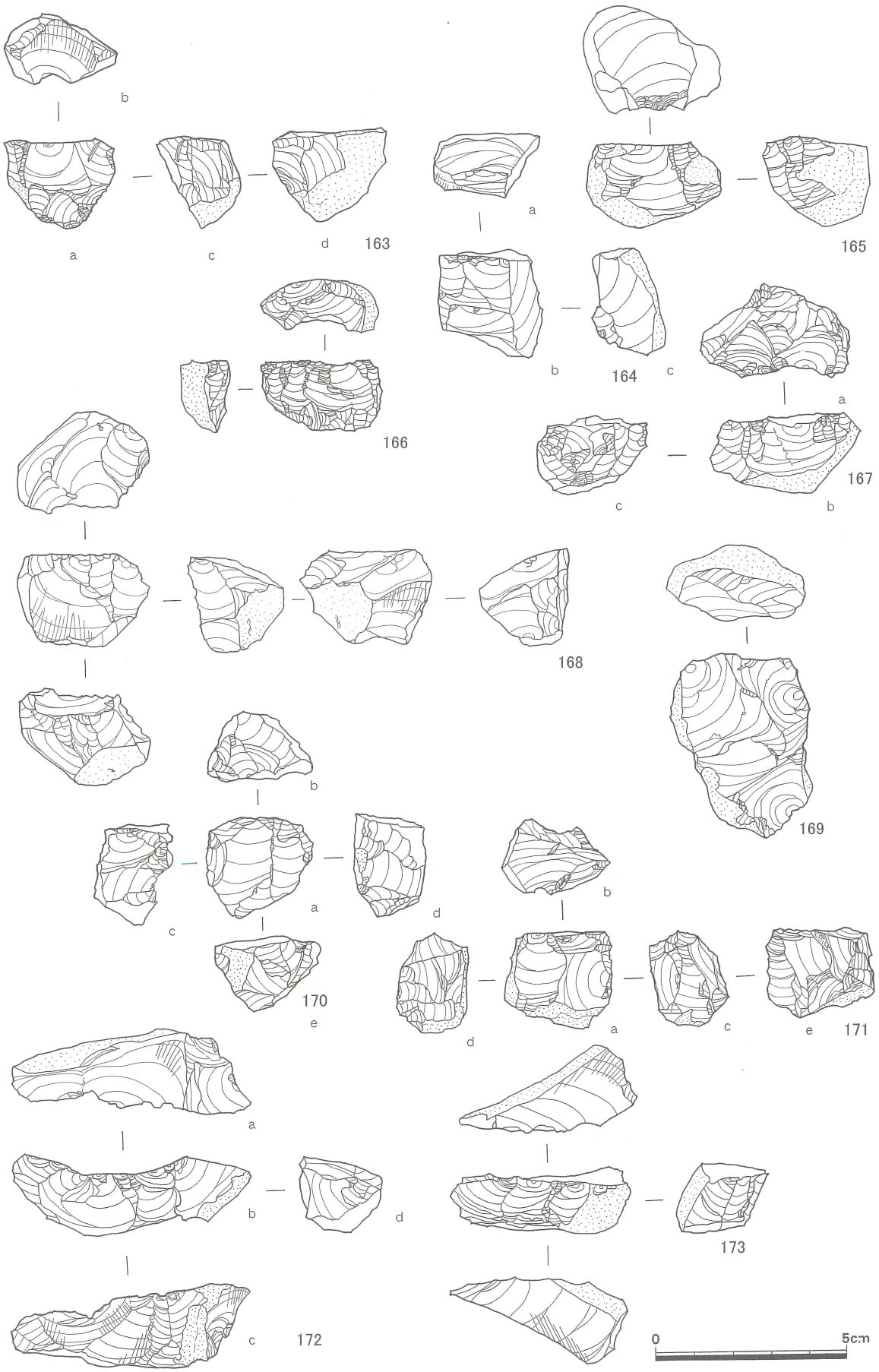
る。148は自然打面を残す漆黒黒曜石の剥片である。下端を主要剥離面より折取り、やや寸詰まりの形態である。左縁に微細な使用痕を残している。Ａ地点２－33トレンチ22号支石墓（ＳＢ３）内部主体の土壙から出土した。149は極小の自然打面を留めた漆黒黒曜石の剥片である。右側縁に顕著な刃こぼれ様の使用痕を残している。Ｄ地点８－５トレンチ44号支石墓（ＳＢ15）内部主体の土壙から出土した。150、151はともにＡ地点２－33トレンチ22号支石墓（ＳＢ３）内部主体の土壙周辺から出土した。150は透明感があり輝度の高い黒曜石の剥片である。主要剥離面から切断し、背面に３本の剥離面を残している。151は透明感があり輝度の高い黒曜石の剥片である。上下端を主要剥離面から切断している。152は透明感があり輝度の高い良質黒曜石の剥片である。背面側から尾部を折り取っている。Ｄ地点５－４トレンチ33号支石墓（ＳＡ６）の破壊された棺内埋土から出土した。154は小石核から剥取された、縞模様が入り透明感がある黒曜石の横広剥片である。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12ピット４から出土した。155は背面全体に自然面を残す黒曜石の剥片である。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12ピット３から出土した。156は155と同じ素材の黒曜石の剥片である。同じ石核から剥取され、接合状態に近いが接合しない。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12ピット１から出土した。157は自然打面から剥取された、縞模様が入り透明感がある黒曜石の剥片である。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12ピット１から出土した。158は透明感がある黒曜石の剥片である。159は輝度の高い良質黒曜石の剥片である。背面に残された自然面の関係からこの剥片を剥取した石核の素材は角礫であったことが看取できる。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12ピット３から出土した。160はＤ地点７－２トレンチ３層から出土した安山岩の剥片である。

特殊な石器（第73図153、第27表、図版78）

153は黒曜石の小礫を素材にした石器である。外見はタマネギの表皮を剥いたような形を呈するものが多い。打面を持たず内面中央の線状の稜線を境にほぼ対照的に割れている。本例では内側、外側左面が、ポジティブ気味に剥離し、右面はネガティブ気味に剥離している。目的的に石器として製作されたものか、あるいは製作途中の工程を示すものか現在のところ不明である。類例を待ちたい。Ｄ地点トレンチからの出土が多く、本例は５－４トレンチ34号支石墓（ＳＡ７）の破壊された石棺の埋土から出土した。

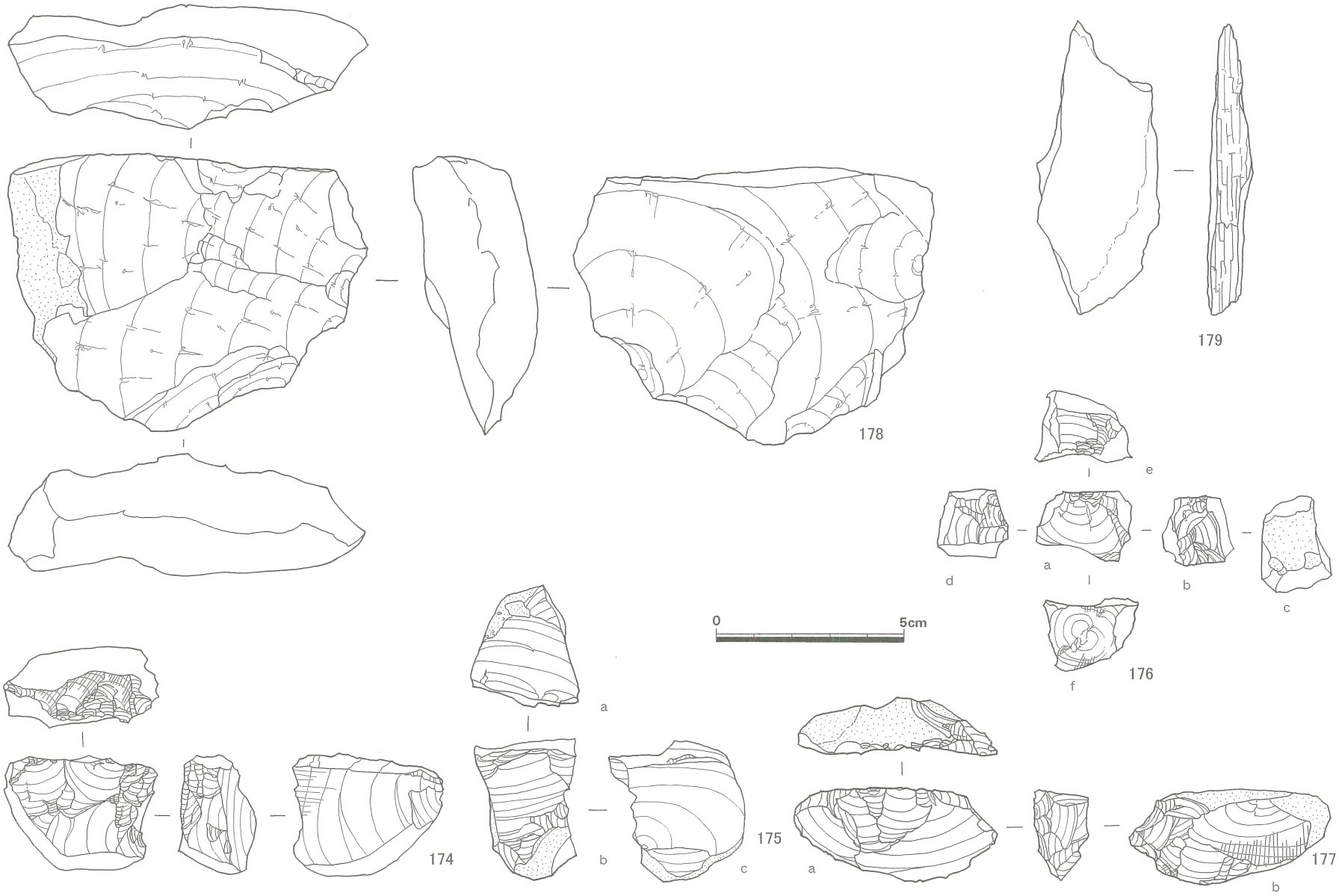
石核（第73・74図161～177、第27表、図版79）

161は黒曜石の角礫から剥取されたやや分厚い白い不純物を含む剥片を素材にした石核である。自然面を打面にした剥離面を２枚残している。Ｄ地点８－２トレンチ49号支石墓（ＳＢ20）内部主体の土壙から出土した。162は輝度の鈍い黒色黒曜石のやや分厚い小振りの剥片を素材にした石核である。未調整の主要剥離面を打面にした２枚の剥離面を残している。Ａ地点２－33トレンチ22号支石墓（ＳＢ３）内部主体の土壙周辺から出土した。163は漆黒黒曜石礫を用いた石核である。ａ面が最終剥離面でｂ面から剥取されている。またａ面には各方向からの剥離面も認められる。そしてｃ面にはａ面からの剥離痕を残している。Ｄ地点５－５トレンチ拡張部の２層から出土した。164は漆黒黒曜石の角礫を用い、打面を90度ずつ転移して剥片を剥



第74図　石器実測図６（163～173）（Ｓ－2/3）

取した石核である。ａ面は調整打面であり、ｂ面はａを打面として剥片を剥取し、フィンジーを起こしている。ｃ面の剥離痕はａの打面より古いものである。Ｄ地点３－15トレンチから出土した。165は漆黒黒曜石の円礫を用いた石核である。礫を半割するように加撃して剥取した面を打面として調整し、剥片の剥取を始めている。Ｄ地点７－２トレンチから出土した。166は漆黒黒曜石の円礫を用いた石核である。円礫を半割し、その面を打面にして剥片を剥取している。左縁からの剥離痕があるがこれは打面からの剥離にフィンジーを起こさせないための調整剥離の可能性が高い。Ｄ地点７－11トレンチからの出土である。167は漆黒黒曜石の角礫を用いた石核である。ａ面が打面でｂ面には大きい剥片１枚とそれより小振りの剥片２枚を剥取した剥離面を残している。ｃ面にパティナの進んだ古い剥離面が認められる。Ｄ地点７－１トレンチから出土した。168は漆黒黒曜石の古い石核を再利用した石核である。石核の下面に打面調整を施し剥片を２枚剥取し、上面の古い剥離面からは４枚の剥片を剥離している。剥取した剥片は寸詰まりのやや横広のものである。Ｄ地点３－３トレンチ31号支石墓（ＳＡ４）の石棺内埋土から出土した。169は灰色黒曜石を用いた石核である。上下と右方向から剥片の剥取を行っているが石の目が悪く剥離面にかなりの凹凸が生じている。剥取された剥片は厚い打瘤と不整な形状のために尾部はフィンジーを起こしている。Ｄ地点３－５トレンチから出土した。170は灰色黒曜石を用いた石核である。ａ面が最終剥離面であってｂ面の調整打面から２枚の剥片を剥取している。ｂ面には打面作出の剥離とは反対方向のｃ面を打面とする剥離面を残し、ｃ面にはａ面を打面として剥片を剥取している。ｄ・ｅ面にも夫々ａ面を打面とした剥離痕を残している。Ｄ地点６－１トレンチから出土した。171は漆黒黒曜石を用いた石核である。ａ面が最終段階のもので３枚の大きな剥離面を留めている。これはｂ面の調整打面とｃ面の剥離面から剥片を剥取した際のものである。ｄ面でも剥片を剥取する為にｅ面右縁に打面調整を施している。剥取された剥片は幅、長さ共に1.5cm以下のものである。Ｄ地点８－３トレンチから出土した。172は漆黒黒曜石を用いた石核である。ａの打面は１回の剥離で２枚の剥離面が残されている。ｂ面はａを打面として剥片を剥取し、ｃ面はｂ面の古い面を打面として剥片を剥取している。従ってｂ面の剥離痕が最も新しいものである。ｃ面・ｄ面にパティナの進んだ古い剥離痕を留めていて、石核として再利用したものである。Ｄ地点３－15トレンチから出土した。173は漆黒黒曜石を用いた石核である。扁平礫を上下に切断しその切断面を打面にして１㎝内外の剥片を剥取している。３枚の剥離痕を留めている。Ｄ地点７－16トレンチから出土した。174は漆黒良質の黒曜石を用いた石核である。円礫をほぼ２分割した素材の上面に打面を設け剥片を剥取している。基本的には上位打面からの剥取であるが剥片の形状を整えるために右方から調整剥離を行っている。剥離面の反対側は大きく横から分割されておりこれが原因で石核としての機能を危うくさせている。Ｄ地点６－１トレンチ２層から出土した。175は不透明灰茶色黒曜石の円礫を用いた石核である。ａ・ｃ面で大きく原面を剥取している。Ａ面から剥離を行うがb面に大きくフィンジーを生じている。Ｄ地点７－２トレンチから出土した。176は不純物を含む漆黒黒曜石を用いたサイコロ状の石核である。ｆ面には加撃痕が無く丸く



第75図　石器実測図７（174～179）（Ｓ－2/3）

剥取されネガティブ面を残している。ｂ面の調整打面からの加撃によりａ面の剥片の剥取が行われ、丸くネガティブ状の剥離痕を留めている。ｂ面はａ面からの打撃であるが打面は消失している。従ってａ面が新しい面である。ｄ面も同様である。背面には素材の自然面を残している。Ｄ地点５－５トレンチ遺構12から出土した。177は漆黒黒曜石の角礫を用いた石核である。自然打面からａ面・ｂ面に連続的に剥片を剥取している。石核としては残核に近い状態である。Ｄ地点７－10トレンチから出土した。

両面加工石器（第75図178、第27表、図版80）

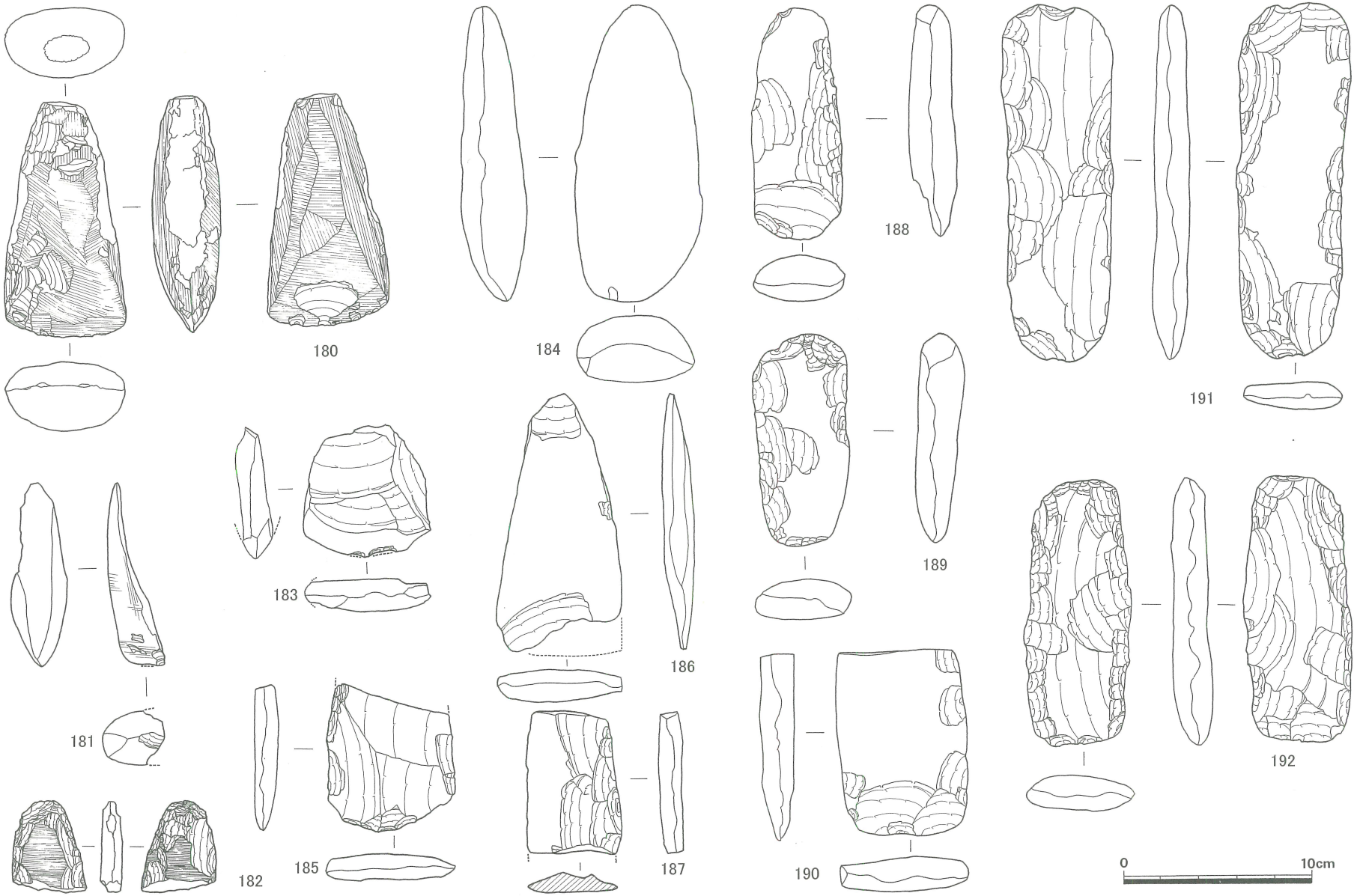
178は玄武岩の厚手横広の剥片を素材にした両面加工石器である。施刃は荒く整った交互剥離ではない。折断は主要剥離面から行い左側縁に自然面を残している。Ｄ地点５－５トレンチ51号支石墓（ＳＢ23）内部主体の土壙最深部からで出土した。

石材（第75図179、第27表、図版80）

179は長崎県西彼杵半島産の結晶片岩である。本遺跡では石器の原材として使用されている。Ｃ地点28号支石墓（ＳＡ１）の棺床直上の埋土から出土した。

石斧（第76・77図180～201、第27表、図版80・81）

180は薄青緑色の硬質砂岩を素材にした基部から刃部に向かって身幅を拡大し、やや厚みのある磨製石斧である。素材を敲打によって整形した後に、研磨によって仕上げている。両側縁には敲打痕が顕著に残され、柄の緊縛が容易なように調整している。頂部には打ち潰れの痕跡がみられる。刃部はやや扁刃を呈し、刃こぼれが顕著に認められる。Ｄ地点７－９トレンチ38号支石墓（ＳＢ４）上石の下部に副葬の状態で出土した。181は蛇紋岩を素材にした磨製石斧で、研磨痕が看取できないほど丁寧な仕上げである。使用により２/３以上を折損している。Ｄ地点７－９トレンチから出土した。182は灰黒色頁岩を素材にした磨製石斧の基端部である。周縁より剥離調整を加えているが剥離面の縁辺は研磨痕が認められず、既製の磨製石斧に何かの目的で調整剥離を施しているもので磨製石斧の再生を図ったか、他の用途に転用した可能性が考えられる。両面と側縁に既製の研磨痕が残されている。Ｄ地点５－３トレンチ２層から出土した。183は大きく折損した磨製石斧の先端刃部である。素材は硬質砂岩とも見受けられるが板状に剥げる特徴から粘板岩に近いものと思われる。刃部は蛤刃であろう。Ｄ地点５－４トレンチ２層から出土した。184は輝石安山岩を素材にした縦型の斧である。全体に粉状になったものが付着するぐらいに風化が進み、成形痕も認め難いほどである。Ｄ地点５－６トレンチ２層から出土した。185は輝石安山岩を素材にした打製石斧の刃部である。薄く剥離された素材に周縁より荒く調整剥離を加えている。左縁は両面からの剥離によって厚みを減じる調整を施している。Ｄ地点６－４トレンチ２層から出土した。186は輝石安山岩の板状剥片を素材にした打製石斧である。風化が著しく刃部は扁刃の凹刃状を呈する。Ａ地点４－13トレンチから出土した。187は輝石安山岩の板状礫を素材にした打製石斧である。調整は荒く刃部は欠損している。Ｄ地点５－３トレンチ２層から出土した。188は輝石安山岩を素材にした小振りの打製石斧である。風化が著しく先端刃部半割のように折損しているが、ほぼ全容を保っている。



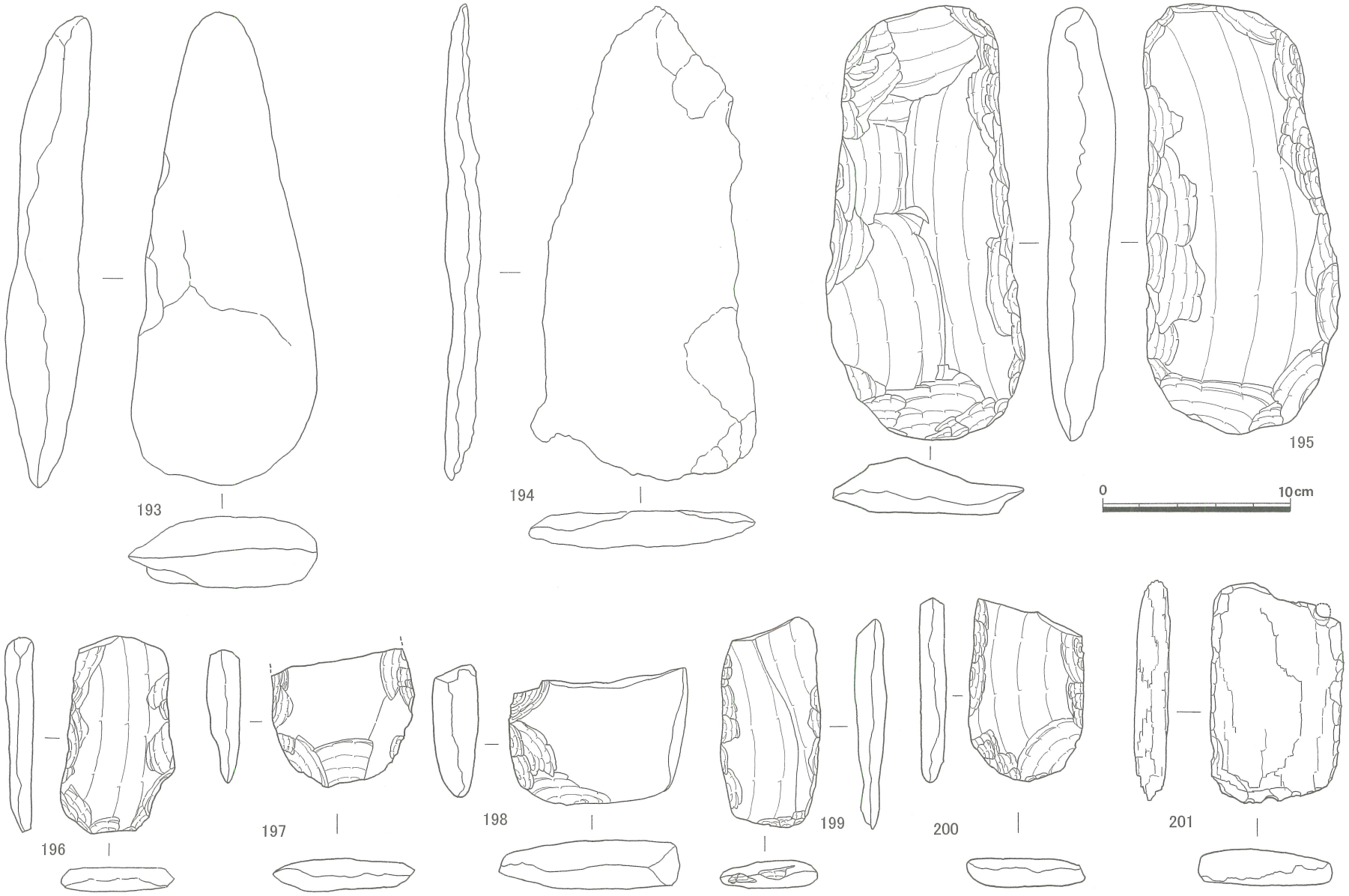
第76図　石器実測図８（180～192）（Ｓ－1/3）

Ｄ地点３－４トレンチから出土した。189は輝石安山岩を素材にした小振りの打製石斧である。風化が著しいが完形である。厚さを調整するために左側縁からの剥離調整が顕著に認められる。Ｄ地点５－７トレンチから出土した。190は輝石安山岩の扁平角礫を素材にした基部を欠く打製石斧である。周縁から荒い調整を施し、刃部は両面から調整して施刃している。Ｄ地点５－２トレンチ２層から出土した。191は輝石安山岩の板状礫を素材にした完形の短冊型打製石斧である。周縁からの調整により整形している。Ｄ地点５－５トレンチ２層から出土した。192は輝石安山岩の横長剥片を素材にした打製石斧である。両面に荒い調整を施し整形している。Ｄ地点５－10トレンチ２層から出土した。193は輝石安山岩を素材にした刃部を磨製により作出した石斧である。調整痕が不明瞭なほど風化が著しく、平面の形状は乳房状を呈している。Ｄ地点８－６トレンチ45号支石墓（ＳＢ16）の上石の下から次の194と並列して副葬の状態で出土した。194は輝石安山岩を薄く打割した素材を用いた扁平な打製石斧である。素材の周縁から調整を施しているが風化が著しい為に不明瞭である。前の193と並列して副葬の状態で出土した。この２例は材質、形状のうえから副葬品として作成された可能性も考えられものである。195は輝石安山岩のやや厚みがある扁平礫を素材にした大型の打製石斧である。周縁から調整を施し整形している。重量は1,070ｇを測り、出土した石斧の中で最重量であった。Ｄ地点７－１トレンチから出土した。196は輝石安山岩の扁平礫を素材にした小型の打製石斧である。周縁から調整を施し整形している。刃部は鈍く、全体に風化が進んでいる。Ａ地点４－８トレンチから出土した。197は輝石安山岩の扁平礫を素材にした打製石斧の刃部である。周縁から調整を施し整形している。Ｄ地点６－６トレンチ３層から出土した。198は輝石安山岩の礫を用いた打製石斧である。左側から刃部にかけて調整して整形している。Ａ地点４－19トレンチから出土した。199は輝石安山岩の断面菱形の扁平礫を素材に用い、周縁よりわずかに調整を施し整形している。刃部は素材の形を活かした調整に留めている。Ｄ地点５－５トレンチ２層から出土した。200は輝石安山岩の扁平礫を素材にした打製石斧である。頭部を折損している。Ｄ地点６－６トレンチ２層から出土した。201は結晶片岩を素材にした打製石斧である。頭部は欠損していて、先端部は両面から調整して刃部作出している。両縁は潰して調整している。横型の石斧の可能性も考えられる。Ｄ地点５－４トレンチ２層から出土した。

注１　諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原高場遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会調査報告書第４集 2002

注２　福岡県教育委員会「小覚原遺跡」『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告－49－』1998

注３　岡本東三「トロトロ石器考」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集－』1983



第77図　石器実測図９（193～201）（Ｓ－1/3）

（単位：cm，g）

挿図番号	番　号	タイプ	記　号	年　次	トレンチ	番　号	石　材	高　さ	幅	厚　さ	重　さ	折れ状況	摘　　要
69	1	01A	02FK	5	5KK	2層	OB	2.3	2.1	0.3	0.9	3	折れ状況
69	2	01A	03FK	7	1	251	OB	2.7	3.3	0.5	1.8	3	1：先端欠損
69	3	01A	03FK	7	9	283	OB	1.6	1.5	0.3	0.6	3	2：下半欠損
69	4	01A	99FK	3	5	124	AN	2.8	2.5	0.4	1.9		3：片脚欠損
69	5	01B	99FK	3	15	233	AN	1.7+	1.9	0.3	0.5	1,3	4：両脚欠損
69	6	01C	03FK	7	1	520	AN	1.6	2.1	0.3	0.8		5：半身欠損
69	7	01C	97FK	1	4	2	OB	2.2+	1.6	0.4	1.2	1	
69	8	01D	FK			H	OB	3.5	2.4	0.4	1.4	3	
69	9	01E	00FK	4	11		AN	2.2	2.3	0.4	1.3		
69	10	01E	03FK	7	9	4	OB	3	1.3+	0.4	0.8	3	
69	11	01E	FK			H	OB	2.6	2.4	0.3	1	1,3	
69	12	02A	03FK	7	1	154	AN	3	2.3	0.5	2	3	
69	13	02A	04FK	8	1	297	OB	2	1.5	0.4	1		
69	14	02A	01FK	5	3	2層	OB	2.2	1.6	0.3	0.9		
69	15	02A	99FK	3	5	54	OB	2.2	1.9	0.3	1		
69	16	02A	99FK	3	15	355	OB	1.7	1.2	0.3	0.5		
69	17	02B	01FK	5	1	H－2層	OB	2.3	1.9	0.4	1.2		
69	18	02B	04FK	8	1	649	OB	1.3+	1.4	0.3	0.6	1	
69	19	02B	99FK	3	15	359	AN	2.8	2.5	0.7	3.7		
69	20	02C	99FK	3	5	122	AN	2.3	1.5	0.3	0.9	3	
69	21	02E	01FK	5	9	2層	OB	2.3	1.4	0.25	0.7	1	
69	22	02E	99FK	3	6	90	AN	2.6	2	0.4	1.2	3	
69	23	02F	99FK	3	5	383	AN	2.2	2.3	0.25	0.7	2	
69	24	04A	01FK	5	4		OB	2.45	2.3+	0.69	2.1	1	35号支石墓（SA8）
69	25	04A	02FK	6	6	2層	OB	1.9	1.3	0.3	0.5		
69	26	04B	02FK	6	6	2層	OB	2.1	1.7	0.3	0.9		
69	27	04B	02FK	5	5KK	2層	OB	1.5+	1.7+	0.3	0.4	2,3	
69	28	04B	02FK	5	5KK	2層	AN	2.9	1.9	0.4	2.3		
69	29	04B	04FK	8	1	633	OB	2.1	1.5	0.3	0.7		
69	30	04D	01FK	5	5	2層	OB	2.4	1.7	0.4	0.9		
69	31	05A	04FK	8	1	820	OB	2.5	1.9	0.3	1.1	3	
69	32	05B	03FK	7	1	215	AN	2.2	2+	0.3	0.5	3	
69	33	05B	04FK	8	1	832	OB	1.5+	1.7	0.3	0.3	3	
69	34	06A	04FK	8	2	157	OB	2.1	2	0.5	1.2		
69	35	06A	99FK	3	1	65	OB	1.8+	2+	0.3	1.2		
69	36	06A	99FK	3	2	145	OB	3+	2.3+	0.4	2.2	2	
69	37	06C	00FK	4	12		OB	2.6	2.2+	0.3	1.2	2	
69	38	06C	02FK	6	4	2層	OB	1.8	1.9	0.3	0.7	3	
69	39	06C	02FK	5	5KK	H	AN	2.9	1.5	0.3	1		
69	40	06C	03FK	7	17	H	OB	3	2	0.3	0.8	1	
69	41	06C	99FK	3	1	36	OB	3.4	1.3+	0.3	0.7	2	
69	42	07A	03FK	7	17	H	OB	2.3	1.7	0.3	0.7	3	
69	43	07B	00FK	4	13	1	OB	1.5	1.5	0.25	0.5		
69	44	07B	03FK	7	18	1530	OB	1.6+	1.6	0.3	0.6		
69	45	07B	04FK	8	2	266	OB	2.7	1.8+	0.4	1.4		
69	46	07B	99FK	3	6	193	OB	2	1.6	0.3	0.8		
69	47	08E	02FK	6	4	2層	OB	2.4+	1.5+	0.5	1.4	1,3	
69	48	09A	02FK	5	5HK	2層	AN	2.3	2	0.4	2.1		
69	49	10A	01FK	5	4		OB	2.24	2+	0.3	1.1	4	33号支石墓（SA6）
69	50	10A	01FK	5	4		OB	2.15+	2.34+	0.4	1.2	2	33号支石墓（SA6）
69	51	10A	03FK	7	1	725	OB	2.7	2+	0.28	1	3	
69	52	10A	03FK	7	1	290	OB	2	1.6+	0.3	0.7	2	
69	53	10A	03FK	7	8	H	AN	2.6	1.6+	0.35	1.3	2	
69	54	10A	03FK	7	9	225	OB	1.9	2	0.3	0.7		
69	55	10A	99FK	3	1	35	OB	1.8	1.4	0.4	0.6	1,3	
69	56	10B	03FK	7	9	314	OB	2.5	1.9+	0.3	1	3	ピット1
69	57	10B	03FK	7	18	1177	OB	3	2+	0.35	1.7	2	
69	58	10B	04FK	8	5	12	OB	1.4+	1.4	0.24	0.5	1	44号支石墓（SB15）
69	59	10B	99FK	3	6	183	AN	2.1	1.9	0.3	1.1	3	
69	60	10C	03FK	7	1	798	OB	2.2	1.5+	0.3	0.6	2	
69	61	10C	04FK	8	2	253	OB	2.8	2+	0.3	1	3	
69	62	10D	00FK	4	8	4	OB	2	1.6	0.3	0.5	2	
69	63	10D	03FK	7	16	304	OB	2.5	1.6	0.4	1	3	ピット10
69	64	10E	03FK	7	19	18	AN	2.35	2	0.4	1.4		
70	65	13A	01FK	5	1	H	OB	1.1	1.7	0.3	0.45	1	
70	66	13A	02FK	5	5KK	2層	OB	1.7	2.2	0.3	0.9		
70	67	13A	03FK	7	2	300	OB	1.9	2.6	0.55	2.3		
70	68	13B	02FK	5	5HK	2層	OB	1.5	1.9	0.3	0.7		
70	69	13B	03FK	7	2	514	OB	1.7	2	1.5	0.6		
70	70	13B	04FK	8	4	1	OB	1.3	1.5	0.3	0.4		
70	71	13E	03FK	7	2	505	OB	1.8	1.8+	0.3	0.4	3	
70	72	14B	99FK	3	6	151	OB	1.8+	1.6	0.3	0.8	4	
70	73	14B	99FK	3	15	309	OB	1.7	1.8	0.3	0.7		
70	74	14B	99FK	3	15	322	OB	1.4	2.1	0.3	0.6		

第26表　石器実測一覧表1

（単位：cm，g）

挿図番号	番　号	器　種	記　号	年　次	トレンチ	番　号	層　位	石　材	高　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　考
70	75	石　鏃	03ＦＫ	7	16	112		ＯＢ	2.7	2.1	0.7	3.9	
70	76	石　鏃	01ＦＫ	5	5		2層	ＯＢ	1.9	2.1	0.4	1.5	遺構12
70	77	石　鏃	04ＦＫ	8	1	197		ＯＢ	3.5	3	1.15	8.7	
70	78	トロトロ石器	03ＦＫ	7	1	525		ＯＢ	2.1	2.3	0.5	1.8	
70	79	トロトロ石器	02ＦＫ	5	5ＫＫ		2層	ＯＢ	1.9	2.2	0.5	1.5	
70	80	トロトロ石器	03ＦＫ	7	18	H		ＯＢ	2.1	2.4	0.6	2	
70	81	トロトロ石器	02ＦＫ	5	5ＨＫ		2層	ＯＢ	1.7	1.9	0.4	1	
70	82	トロトロ石器	99ＦＫ	3	5	388		ＯＢ	1.8	2.3	0.6	1.6	
70	83	トロトロ石器	99ＦＫ	3	5	242		ＯＢ	1.7	1.3	0.3	0.6	
70	84	トロトロ石器	02ＦＫ	5	5ＫＫ	H		ＯＢ	2	1.8	0.4	1.7	
70	85	トロトロ石器	04ＦＫ	8	2	44		ＯＢ	2.9	1.5	0.4	1.1	
70	86	トロトロ石器	01ＦＫ	5	4		2層	ＯＢ	3.1	1.4	0.5	1.4	
70	87	トロトロ石器	03ＦＫ	7	1	151		ＯＢ	2.4	1.9	0.4	1.1	
70	88	三稜尖頭器	00ＦＫ	4	16			ＯＢ	2.2＋	1.8＋	1.3	3.2	
70	89	石　槍	02ＦＫ	5	5ＫＫ		2層	ＡＮ	2.7	1.8	0.8	4	
70	90	石　鏃	01ＦＫ					ＡＮ	2.9	1.1	0.4	2.2	34号支石墓（ＳＡ７）稽内埋土
70	91	石　槍	03ＦＫ	7	1	432		ＡＮ	2.8＋	1.4	0.85	3.3	
70	92	石　槍	03ＦＫ	7	9	211		ＡＮ	5.1	1.3	1.15	8.2	
70	93	石　槍	02ＦＫ	5	5ＨＫ		2層	ＡＮ	4.6	2.4	1.2	13	削器として再利用
70	94	石　槍	02ＦＫ	5	5ＫＫ		2層	ＡＮ	3.5	1.7	0.8	4.4	
70	95	石　槍	02ＦＫ	5	5ＫＫ		2層	ＡＮ	2.75＋	1.25	0.5	1.6	
70	96	掻　器	04ＦＫ	8	1	777		ＯＢ	1.9	2	0.7	2.2	
71	97	抉　入	99ＦＫ	3	6	52		ＯＢ	4.2	1.9	0.9	3.8	
71	98	抉　入	03ＦＫ	7	1	803		ＯＢ	3.6	2.5	1.2	8.7	
71	99	抉　入	01ＦＫ	5	5		2層	ＯＢ	3.7	1.3	0.5	1.7	遺構12
71	100	抉　入	02ＦＫ	6	6		2層	ＯＢ	1.9	3.1	0.7	2.3	
71	101	抉　入	02ＦＫ	6	1		2層	ＯＢ	1.7	2.5	0.6	1.8	
71	102	抉　入	03ＦＫ	7	9	501		ＯＢ	1.3	2.1	0.4	0.9	ピット２
71	103	抉　入	03ＦＫ	7	1	389		ＯＢ	2.6	1.8	0.5	2.4	
71	104	掻　器	99ＦＫ	3	6	8		ＯＢ	2	2	0.6	2.2	
71	105	掻　器	03ＦＫ	7	18	23		ＯＢ	2.8	3	0.9	6.2	
71	106	掻　器	04ＦＫ	8	1	370		ＯＢ	4.3	2.3	1.3	10	
71	107	削　器	03ＦＫ	7	3	158	3層	ＯＢ	1.2	2.2	0.3	0.7	
71	108	削　器	99ＦＫ	3	30	2		ＡＮ	5	6.6	2.3	69.7	52号支石墓（ＳＢ12）
71	109	削　器	99ＦＫ	3	5	297		ＡＮ	3.2	3.9	1.1	12.8	
71	110	削　器	99ＦＫ	3	15	310		ＡＮ	2.7	4.3	1	11.2	
71	111	削　器	99ＦＫ	3	1	69		ＡＮ	4.1	5.6	1.7	34.8	
71	112	削　器	03ＦＫ	7	1	484		ＡＮ	4.3	4.8	1	20	
72	113	削　器	03ＦＫ	7	2	33		ＯＢ	3.8	1.8	0.7	4.3	
72	114	削　器	03ＦＫ	7	9	553		ＯＢ	2.18	1.88	0.45	2.3	ピット２
72	115	削　器	99ＦＫ	5				ＯＢ	2.6	2.1	0.5	3.1	30号支石墓（ＳＡ３）
72	116	彫　器	99ＦＫ	3	5	143		ＯＢ	2.2	3.7	1	7.6	
72	117	彫　器	99ＦＫ	3	30	4		ＡＮ	4.5	3.3	1.7	17.1	52号支石墓（ＳＢ12）
72	118	石　錐	03ＦＫ	7	2	32		ＡＮ	2.4	2.3	0.6	3	
72	119	石　錐	04ＦＫ	8	1	901		ＡＮ	2.5	2.5	0.5	2.6	
72	120	石　錐	99ＦＫ	3	4	59		ＯＢ	2.3	1.8	0.36	1.2	
72	121	石　錐	99ＦＫ	3	15	263		ＯＢ	2.6	1.6	0.7	2.1	
72	122	使用痕のある剥片	01ＦＫ					ＯＢ	4.1	1.7	0.4	3	33号支石墓（ＳＡ６）
72	123	剥　片	03ＦＫ	7	9	407		ＯＢ	1.9	3.65	1.1	8.2	ピット１
72	124	剥　片	01ＦＫ			2		ＯＢ	4.5	2	0.6	5.3	34号支石墓（ＳＡ７）
72	125	剥　片	01ＦＫ					ＯＢ	4.1	2.4	1	7.7	35号支石墓（ＳＡ８）
72	126	剥　片	04ＦＫ	8	5	27		ＯＢ	3.2	2.9	1.1	4.7	44号支石墓（ＳＢ15）
72	127	剥　片	98ＦＫ		33			ＯＢ	4	1.4	0.5	3.4	22号支石墓（ＳＢ３周辺）
72	128	剥　片	02ＦＫ	5				ＯＢ	2	1.5	0.2	1	51号支石墓（ＳＢ23）
72	129	剥　片	04ＦＫ	8	6	101		ＯＢ	1.8	1.8	0.3	0.7	ピット１
72	130	使用痕のある剥片	03ＦＫ	7	9	267		ＯＢ	1.7	1.2	0.3	1.3	38号支石墓（ＳＢ４）
72	131	使用痕のある剥片	03ＦＫ	7	16	268	3層	ＯＢ	1.8	1.5	0.5	1	
72	132	剥　片	98ＦＫ		33			ＯＢ	2.8	1.2	0.7	1.6	22号支石墓（ＳＢ３）上石周辺
72	133	剥　片	01ＦＫ	5	5		2層	ＯＢ	3.2	1	0.4	1.4	遺構12
72	134	剥　片	01ＦＫ	5	5		2層	ＯＢ	2.9	1.3	0.35	1.6	遺構12
72	135	使用痕のある剥片	99ＦＫ	3	30	1		ＯＢ	2.6	2.2	0.5	3.3	52号支石墓（ＳＢ12）
72	136	使用痕のある剥片	04ＦＫ	8	2	481	3層	ＯＢ	2.1	1.1	0.3	0.3	49号支石墓（ＳＢ20）
73	137	使用痕のある剥片	03ＦＫ	7	3	160	3層	ＯＢ	2.8	2.1	0.9	3.5	
73	138	使用痕のある剥片	02ＦＫ	5	5		ＳＴ	ＯＢ	4.1	2	0.7	3.8	
73	139	剥　片	99ＦＫ	3	24	3		ＯＢ	2.7	2.8	1.1	4.2	42号支石墓（ＳＢ11）
73	140	剥　片	99ＦＫ	3	24	2		ＯＢ	3.6	2.2	1.1	6.3	42号支石墓（ＳＢ11）
73	141	剥　片	01ＦＫ	5	10			ＯＢ	1.9	2.1	0.3	0.8	遺構13・ピット12
73	142	剥　片	04ＦＫ	8	5	17		ＯＢ	2.3	2.5	0.6	2.4	44号支石墓（ＳＢ15）
73	143	剥　片	03ＦＫ	7	2	597	3層	ＯＢ	3.3	2.6	1.2	6	
73	144	剥　片	04ＦＫ	8	2	514	3層	ＯＢ	1.5	2.6	0.9	2.5	49号支石墓（ＳＢ20）
73	145	剥　片	03ＦＫ	7	3	155	3層	ＯＢ	2.2	1.8	0.3	2	
73	146	剥　片	03ＦＫ	7	2	601	3層	ＯＢ	2.2	1.8	0.6	1.6	
73	147	剥　片	97ＦＫ					ＯＢ	2.5	1	0.3	1	28号支石墓（ＳＡ１）
73	148	使用痕のある剥片	98ＦＫ		33			ＯＢ	1.7	1.5	0.5	1.2	22号支石墓（ＳＢ３周辺）
73	149	使用痕のある剥片	04ＦＫ	8	5	22		ＯＢ	2.7	1.1	0.3	1.3	44号支石墓（ＳＢ15）
73	150	剥　片	98ＦＫ		33			ＯＢ	1.8	0.9	0.2	0.4	22号支石墓（ＳＢ３周辺）
73	151	剥　片	98ＦＫ		33			ＯＢ	1.5	0.9	0.2	0.4	22号支石墓（ＳＢ３周辺）
73	152	剥　片	01ＦＫ					ＯＢ	1.5	1.9	0.3	0.7	33号支石墓（ＳＡ６）
73	153	特殊な石器	01ＦＫ					ＯＢ	2	3	1.1	2.4	34号支石墓（ＳＡ７）
73	154	剥　片	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	1.6	2.4	0.4	1.2	遺構12・ピット４
73	155	剥　片	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	2.4	1.7	0.5	1.8	遺構12・ピット３
73	156	剥　片	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	2.1	1	0.2	0.5	遺構12・ピット１
73	157	剥　片	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	2.6	2.3	0.6	3.3	遺構12・ピット１
73	158	剥　片	03ＦＫ	7	2	610	3層	ＯＢ	1.8	1.3	0.4	0.8	
73	159	剥　片	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	3.2	1.6	0.3	1.2	遺構12・ピット３
73	160	剥　片	03ＦＫ	7	2	607	3層	ＡＮ	2.2	2.8	0.6	2.3	
73	161	石　核	04ＦＫ	8	2	462		ＯＢ	3	3.5	1.5	9.3	49号支石墓（ＳＢ20）
73	162	石　核	98ＦＫ		33		2層	ＯＢ	2	2.5	0.8	3.2	22号支石墓（ＳＢ３周辺）
74	163	石　核	02ＦＫ	5	5ＫＫ		2層	ＯＢ	2.3	2.8	2.2	11.2	
74	164	石　核	99ＦＫ	3	15	18		ＯＢ	2.8	2.7	1.9	14.3	
74	165	石　核	03ＦＫ	7	2	407		ＯＢ	2.2	3.5	2.8	25.7	
74	166	石　核	03ＦＫ	7	11	69		ＯＢ	1.8	3.1	1.3	7.7	
74	167	石　核	03ＦＫ	7	1	72		ＯＢ	2.35	3.7	2.1	18.5	
74	168	石　核	99ＦＫ					ＯＢ	2.5	3.4	2.6	17.6	31号支石墓（ＳＡ４）
74	169	石　核	99ＦＫ	3	5	127		ＯＢ	4.8	3.7	2	30.3	
74	170	石　核	02ＦＫ	6	1		3層	ＯＢ	2.7	2.9	1.9	14.3	
74	171	石　核	04ＦＫ	8	3	33		ＯＢ	2.5	2.8	2	13.1	
74	172	石　核	99ＦＫ	3	15	56		ＯＢ	2.1	6.2	2.2	19.4	
74	173	石　核	03ＦＫ	7	16	90		ＯＢ	1.8	4.7	2.2	15.3	
75	174	石　核	02ＦＫ	6	1		2層	ＯＢ	3.2	3.9	2.1	25.5	
75	175	石　核	03ＦＫ	7	2	62		ＯＢ	3.7	2.8	3.2	34.2	
75	176	石　核	01ＦＫ	5	5			ＯＢ	1.9	2.6	1.8	8.4	遺構12
75	177	石　核	04ＦＫ	8	7-10	615		ＯＢ	2.5	5.3	1.5	15	
75	178	剥　片	02ＦＫ	5				玄武岩	7.5	9.5	3.2	215	51号支石墓（ＳＢ23）
75	179	原　石	97ＦＫ					結晶片岩	7.7	3.3	1.1	28.7	28号支石墓（ＳＡ１）
76	180	磨製石斧	03ＦＫ	7	9	570		硬質砂岩	12.5	6.3	3.6	380	38号支石墓（ＳＢ４）
76	181	磨製石斧	03ＦＫ	7	9	H		蛇紋岩	9.9	2.2	85	60	刃部破片
76	182	磨製石斧	01ＦＫ	5	3		2層	頁　岩	4.8	3.7	1.15	25	頭部破片
76	183	磨製石斧	01ＦＫ	5	4		2層	硬質砂岩	11.5	6.9	1.7	230	刃部破片
76	184	磨製石斧	01ＦＫ	5	6		2層	輝石安山岩	15.4	6.7	3.4	425	完形
76	185	打製石斧	02ＦＫ	6	4		2層	輝石安山岩	7.6	6.7	1.25	70	刃部破片
76	186	打製石斧	00ＦＫ	4	13	H		輝石安山岩	13.8	6.5	1.6	150	完形
76	187	打製石斧	01ＦＫ	5	3		2層	輝石安山岩	7.5	4.95	1.3	60	頭部破片
76	188	打製石斧	99ＦＫ	3	4	H		輝石安山岩	12.5	4.75	2.5	180	完形
76	189	打製石斧	01ＦＫ	5	7	H		輝石安山岩	11.1	5.95	2.2	175	完形
76	190	打製石斧	01ＦＫ	5	2		2層	輝石安山岩	9.8	6.7	1.8	200	刃部破片
76	191	打製石斧	01ＦＫ	5	5		2層	輝石安山岩	18.5	5.8	1.95	280	完形
76	192	打製石斧	01ＦＫ	5	10		2層	輝石安山岩	13.95	5.8	1.9	210	完形
77	193	打製石斧	04ＦＫ	8	6	105		輝石安山岩	24.7	9.8	3.7	980	45号支石墓（ＳＢ16）
77	194	打製石斧	04ＦＫ	8	6	106		輝石安山岩	24.5	11.9	1.7	480	45号支石墓（ＳＢ16）
77	195	打製石斧	03ＦＫ	7	1	H		輝石安山岩	22.5	10	3.5	1070	完形
77	196	打製石斧	00ＦＫ	4	8	H		輝石安山岩	10.5	5.8	1.4	120	完形
77	197	打製石斧	02ＦＫ	6	6		3層	輝石安山岩	9.45	6.1	1.4	110	刃部破片
77	198	打製石斧	00ＦＫ	4	19		2層	輝石安山岩	6.5	9.4	2.4	250	刃部破片
77	199	打製石斧	01ＦＫ	5	5		2層	輝石安山岩	11.1	5.15	1.5	100	完形
77	200	打製石斧	02ＦＫ	6	6		2層	輝石安山岩	9.78	6.14	1.3	110	刃部破片
77	201	打製石斧	01ＦＫ	5	4		2層	結晶片岩	6.9	6.5	1.6	90	刃部破片

第27表　石器実測一覧表２

（単位：cm，g）

No.	挿図番号	番号	タイプ	記号	年次	トレンチ	番号	石材	高さ	幅	厚さ	重さ	折れ状況	実測	摘要
1	69	1	01A	02FK	5	5KK	2層	OB	2.3	2.1	0.3	0.9	3	*	
2			01A	02FK	5	5K	2層	AN	2.75	2.97+	0.88	5.2	3		
3			01A	02FK	6	2	3層	AN	3.44+	3.24+	0.84	5.7	1,4		
4			01A	02FK	6	6	2層	AN	2.69	2.08	0.54	2.7			
5	69	2	01A	03FK	7	1	251	OB	2.7	3.3	0.5	1.8	3	*	
6	69	3	01A	03FK	7	9	283	OB	1.6	1.5	0.3	0.6	3	*	
7			01A	03FK	7	1	799	OB	1.3	1.05	0.15	0.2			
8			01A	03FK	7	1	813	OB	1.3+	1.5+	0.15	0.2	2		
9			01A	03FK	7	11	15	AN	2.88	2.19+	0.39	2	3		
10			01A	97FK	1	8		OB	2.88	2.99	0.36	2.08			
11	69	4	01A	99FK	3	5	124	AN	2.8	2.5	0.4	1.9		*	
12			01B	03FK	7	17	H	OB	2.3	2.1+	0.3	1.3	3		
13			01B	04FK	8	1	676	AN	2.44	2.41+	0.44	1.9	3		
14			01B	04FK	8	4	H	AN	3.01+	2.62+	0.77	4.9	1,3		
15	69	5	01B	99FK	3	15	233	AN	1.7+	1.9	0.3	0.5	1,3	*	
16			01C	01FK	5	5	2層	OB	1.34+	2.05	2.78	0.6	1		
17			01C	02FK	6	3	2層	OB	2.81	1.8	0.42	1.6	3		
18			01C	02FK	6	4	2層	OB	1.5	1.43	0.27	0.4	1,4		
19			01C	02FK	6	4	H	OB	2.7	2.038+	0.35	1.5	3		
20			01C	02FK	6	4	H	OB	1.67+	1.73+	0.25	0.8	1,3		
21	69	6	01C	03FK	7	1	520	AN	1.6+	2.1	0.3	0.8		*	
22			01C	03FK	7	11	1	OB	1.35+	1.78	0.27	0.6	1		
23			01C	03FK	7	17	H	OB	2.24+	2.25	0.35	1.3	1		
24			01C	03FK	7	19	12	AN	3.54	2.21+	0.36	2	3		
25			01C	03FK	7	10	H	AN	1.5+	1.9+	0.2	0.6	1,3		
26			01C	04FK	8	1	643	OB	1.28+	1.8	0.24	0.6	1,3		
27	69	7	01C	97FK	1	4	2	OB	2.2+	1.6	0.4	1.2	1	*	
28			01C	99FK	3	3	29	OB	1.25+	1.87	0.31	0.5	1		
29			01C	FK			H	OB	1.38+	2.05	0.26	0.6	1		
30			01D	03FK	7	19	21	AN	2.05	1.72	0.23	0.8			
31			01D	03FK	7	19	11	OB	2.1	1.7	0.35	0.6			
32	69	8	01D	FK			H	OB	3.5	2.4+	0.4	1.4	3	*	
33			01D	FK			H	OB	2.14+	2.4+	0.33	0.9	1,4		
34	69	9	01E	00FK	4	11		AN	2.2	2.3	0.4	1.3		*	
35			01E	01FK	5	5	2層	AN	1.48+	2.1+	0.48	0.7	1,3		
36	69	10	01E	03FK	7	9	4	OB	3	1.3	0.4	0.8	3	*	
37			01E	03FK	7	2	256	OB	2.04+	1.52+	0.35	0.7	2,4		
38			01E	03FK	7	19	4	OB	1.47+	1.8+	0.4	0.9	1,3		
39	69	11	01E	FK			H	OB	2.6	2.4	0.3	1	1,3	*	
40			02A	01FK	5	2	H	OB	2.15	1.98+	0.35	1.4	3		
41			02A	01FK	5	5	2層	OB	1.85+	1.77+	0.28	0.7	1,3		
42			02A	01FK	5	6	2層	OB	2.21+	1.98+	0.63	2.3	1,4		
43			02A	01FK	5	8	2層	OB	2.53	1.73+	0.44	1.4	3		
44			02A	02FK	5	5HK	3層	OB	1.72+	1.63	0.31	0.7	1		
45			02A	02FK	6	4	2層	OB	2.05+	1.59+	0.34	1	3		
46			02A	02FK	6	6	3層	OB	2.11+	2.3+	0.4	1.8	2		
47	69	12	02A	03FK	7	1	154	AN	3	2.3	0.5	2	3	*	
48			02A	03FK	7	1	279	OB	2.31	1.84+	0.34	1.3	3		
49			02A	03FK	7	1	704	AN	1.6	1.2	0.35	0.7			
50			02A	03FK	7	1	510	OB	1.7+	2.2	0.4	1.4	1		
51			02A	03FK	7	2	126	AN	2.38	1.78+	0.37	1.1	3		
52			02A	03FK	7	18	587	OB	1.2+	1.5+	0.2	0.3	1		
53	69	13	02A	04FK	8	1	297	OB	2	1.5	0.4	1		*	
54			02A	04FK	8	1	731	AN	1.5+	1+	0.25	0.5	4		
55			02A	04FK	8	1	883	OB	1.7+	1.4+	0.2	0.5	4		
56			02A	04FK	8	6	17	AN	2.15+	1.46	0.27	0.8	2		
57	69	14	02A	01FK	5	3	2層	OB	2.2	1.6	0.3	0.9		*	
58			02A	97FK	1	8	3	OB	1.05+	1.73	0.29	0.7	1		
59	69	15	02A	99FK	3	5	54	OB	2.2	1.9	0.3	1		*	
60	69	16	02A	99FK	3	15	355	OB	1.7	1.2	0.3	0.5		*	
61			02A	99FK	3	3	140	AN	1.59+	1.85+	0.3	0.8	1,2		
62			02A	99FK	3	6	160	OB	2.2+	1.8+	0.3	0.4	2		
63			02A	FK			H	OB	3.01+	2.6+	0.47	2.3	4		
64	69	17	02B	01FK	5	1	H－2層	OB	2.3	1.9	0.4	1.2		*	
65			02B	01FK	5	2	2層	OB	2.3	1.83+	0.36	1.6	3		
66			02B	01FK	5	5	2層	OB	2.39	1.93+	0.49	1.8	3		
67			02B	01FK	5	5	2層	AN	1.45+	1.77+	0.31	0.8	1,3		
68			02B	02FK	5	5K		AN	2.25	1.76+	0.3	1	4		
69			02B	02FK	6	6	2層	AN	2.62	1.93+	0.45	2	3		
70			02B	03FK	7	1	663	AN	2.06	1.62+	0.37	0.8	3		
71			02B	03FK	7	9	560	AN	1.99+	1.86+	0.26	0.7	1,3		
72			02B	03FK	7	9	463	AN	1.5+	1.73+	0.28	0.7	1		
73			02B	04FK	3	15	19	AN	1.27+	1.65	0.27	0.6	1		
74	69	18	02B	04FK	8	1	649	OB	1.3+	1.4	0.3	0.6	1	*	
75	69	19	02B	99FK	3	15	359	AN	2.8	2.5	0.7	3.7		*	
76			02B	99FK	3	3	61	OB	2.14+	1.98+	0.45	1.5	1,3		
77			02B	FK			H	OB	1.5+	1.5	0.3	0.6	1		
78			02C	03FK	7	1	25	OB	1.96	1.85	0.39	0.8			
79			02C	03FK	7	4	H	AN	1.9+	1.8	0.29	0.9	1		
80	69	20	02C	99FK	3	5	122	AN	2.3	1.5	0.3	0.9	3	*	
81			02E	00FK	4	27		AN	1.99+	1.62+	0.36	0.8	1,4		
82	69	21	02E	01FK	5	9	2層	OB	2.3	1.4	0.25	0.7	1	*	
83			02E	02FK	6	1	3層	OB	1.75	1.74+	0.29	0.3	3		
84			02E	03FK	7	19	H	AN	1.75+	1.9	0.45	1.2	1		
85	69	22	02E	99FK	3	6	90	AN	2.6	2	0.4	1.2	3	*	
86			02E	FK			H	OB	2.25+	1.29+	0.41	0.9	1,3		
87	69	23	02F	99FK	3	5	383	AN	2.2	2.3	0.25	0.7	2	*	
88	69	24	04A	01FK	5	4	SA8	OB	2.45	2.3+	0.69	2.1	1	*	35号支石墓（SA8）
89			04A	01FK	5	3	2層	OB	2.23	1.32	0.35	1			
90			04A	02FK	5	5HK	2層	OB	2.21	1.7+	0.4	0.7	3		
91	69	25	04A	02FK	6	6	2層	OB	1.9	1.3	0.3	0.5		*	
92			04A	02FK	6	4	2層	OB	1.9	1.5+	0.2	0.7	3		
93			04A	02FK	6	4	2層	OB	2.35	1.55+	0.3	0.8	3		
94			04A	02FK	6	6	H	OB	1.86+	1.51	0.37	0.8	1		
95			04A	03FK	7	4	H	OB	2.3	1.6	0.3	1.3			
96			04A	03FK	7	5	H	OB	1.81	1.66+	0.25	0.5	3		
97			04A	03FK	7	9	82	OB	1.89	1.57+	0.25	0.5	3		
98			04A	03FK	7	10	H	OB	1.89+	1.51+	0.25	0.7	1,3		
99			04A	03FK	7	18	865	OB	2.02+	1.82+	0.27	0.9	1		
100			04A	03FK	7	18	917	OB	2.05+	1.31+	0.25	0.6	1,3		
101			04A	03FK	7	9	H	OB	2.9	2.1	0.5	2.1			
102			04A	04FK	8	3	44	OB	2.07+	1.57+	0.32	0.9	1,2		
103			04A	04FK	8	4	H	AN	1.85+	1.8	0.3	1.1	1		
104			04A	99FK	3	3	1	OB	2.25	1.95	0.4	1.6	4		
105			04A	99FK	3	5	316	OB	1.9+	2	0.5	1.8	1		
106			04A	FK			H	AN	1.65	1.5	0.3	0.6			
107			04A	FK			H	OB	2.12	1.27	0.42	0.9			
108			04A	FK			H	OB	2.59	1.95	0.66	2.5			
109			04A	FK			H	OB	2.05+	2.1	0.4	1.5			
110			04B	01FK	5	2	2層	AN	1.97+	1.72	1.39	1	1		
111			04B	01FK	5	4		OB	1.96+	1.59+	0.34	0.9	1,3		
112			04B	01FK	5	5	2層	OB	2.2	1.54+	0.3	0.7	3		
113			04B	01FK	5	10	2層	OB	1.8+	1.76	0.35	0.9	1		
114	69	27	04B	02FK	5	5KK	2層	OB	1.5+	1.7+	0.3	0.4	2,3	*	
115	69	28	04B	02FK	5	5KK	2層	AN	2.9	1.9	0.4	2.3		*	
116			04B	02FK	5	5HK	2層	OB	2.18	1.94+	0.43	1.6	3		
117	69	26	04B	02FK	6	6	2層	OB	2.1	1.7	0.3	0.9		*	
118			04B	02FK	6	3	2層	OB	1.96+	1.76+	0.47	1.2	1,3		
119			04B	03FK	7	1	874	AN	2.4+	1.5+	0.34	1.1	1,3		
120			04B	03FK	7	9	338	OB	2.1+	2.17+	0.5	1.4	1		
121			04B	03FK	7	17	H	OB	2.4	1.9+	0.37	1.1	3		
122			04B	03FK	7	17	H	OB	1.52+	2.05+	0.36	1	1,3		
123			04B	03FK	7	18	75	AN	1.73+	2.09+	0.46	1.3	1,3		
124	69	29	04B	04FK	8	1	633	OB	2.1	1.5	0.3	0.7		*	

第28表　石鏃分類表１

（単位：cm，g）

No.	挿図番号	番号	タイプ	記号	年次	トレンチ	番号	石材	高さ	幅	厚さ	重さ	折れ状況	実測	摘要
125			04B	04FK	8	1	525	AN	1.52	1.82	0.24	0.5			
126			04B	FK			H	AN	1.76+	1.67	0.28	0.6	1,3		
127			04B	FK			2層	OB	1.85	1.59+	0.38	0.7	3		
128	69	30	04D	01FK	5	5	2層	OB	2.4	1.7	0.4	0.9		*	
129			04E	04FK	8	1	H	OB	2.05	1.4	0.3	0.7			
130			05A	01FK	5	3	2層	OB	1.76+	1.52	0.3	0.6	1,3		
131			05A	01FK	5	5	2層	AN	2.07	1.83+	0.34	1	3		
132	69	31	05A	04FK	8	1	820	OB	2.5+	1.9	0.3	1.1	3	*	
133			05A	04FK	8	3	152	OB	2.65+	2.3+	0.41	1.8	4		
134			05B	02FK	6	6	3層	AN	2	2.18+	0.39	1.3	1		
135	69	32	05B	03FK	7	1	215	AN	2.2	2+	0.3	0.5	3	*	
136			05B	03FK	7	18	1396	OB	2.25+	2.02+	0.4	1.7	1		
137	69	33	05B	04FK	8	1	832	OB	1.5+	1.7	0.3	0.3	3	*	
138			05B	99FK	3	5	247	OB	1.98+	1.86+	0.34	1	1,4		
139			06A	01FK	5	2	2層	OB	2.2+	1.26+	0.4	0.9	1,2		
140			06A	03FK	7	1	880	OB	1.09+	1.66	0.25	0.5	1		
141	69	34	06A	04FK	8	2	157	OB	2.1	2	0.5	1.2		*	
142			06A	04FK	8	1	618	OB	1.91	1.51+	0.29	0.53	3		
143			06A	04FK	8	1	876	OB	2.09	1.55+	0.31	0.9	4		
144			06A	04FK	8	4	H	AN	2.08	1.38+	0.31	0.9	4		
145	69	35	06A	99FK	3	1	65	OB	1.8+	2+	0.3	1.2		*	
146	69	36	06A	99FK	3	2	145	OB	3+	2.3+	0.4	2.2	2	*	
147			06A	99FK	3	15	42	OB	2.09	1.53+	0.23	0.6	4		
148			06A	FK			H	AN	2.62	1.67+	0.38	1.4	4		
149			06B	03FK	7	1	88	OB	2.24	1.74+	0.27	0.8	3		
150			06B	FK			H	OB	2.12	1.66+	0.29	0.8	3		
151	69	37	06C	00FK	4	12		OB	2.6	2.2+	0.3	1.2	2	*	
152	69	39	06C	02FK	5	5KK	H	AN	2.9	1.5	0.3	1		*	
153	69	38	06C	02FK	6	4	2層	OB	1.8	1.9	0.3	0.7	3	*	
154			06C	02FK	6	4	2層	OB	1.69+	2.45	0.27	1	1		
155			06C	02FK	6	4	2層	OB	1.76+	1.61+	0.29	0.8	1,4		
156	69	40	06C	03FK	7	17	H	OB	2+	2	0.3	0.8	1	*	
157	69	41	06C	99FK	3	1	36	OB	2.4	1.3+	0.3	0.7	2	*	
158	69	42	07A	03FK	7	17	H	OB	2.3	1.7+	0.3	0.7	3	*	
159	69	43	07B	00FK	4	13	1	OB	1.5	1.5	0.25	0.5		*	
160			07B	02FK	5	5HK	3層	OB	1.75+	1.76	0.26	0.8	1		
161	69	44	07B	03FK	7	18	1530	OB	1.76+	1.6	0.3	0.6		*	
162			07B	03FK	7	1	902	AN	1.76+	1.65+	0.25	0.7	1,3		
163			07B	03FK	7	1	H	OB	1.7+	1.53+	0.24	0.6	3		
164	69	45	07B	04FK	8	2	266	OB	2.7	1.8+	0.4	1.4		*	
165			07B	04FK	8	2	164	OB	1.77	1.54+	0.36	0.8	3		
166	69	46	07B	99FK	3	6	193	OB	2	1.6	0.3	0.8		*	
167			08A	01FK	5	6	2層	OB	1.62	2.09	0.35	1.1	1		
168			08A	02FK	5	5HK	H	OB	1.3+	1.64	0.35	0.6	1		
169			08A	03FK	7	1	H	OB	1.25+	2+	0.3	0.6	1,3		
170			08A	04FK	8	1	630	OB	1.29+	1.82	0.28	0.7	1		
171			08B	03FK	7	18	491	OB	1.4+	0.7+	0.2	0.2	5		
172	69	47	08E	02FK	6	4	2層	OB	2.4+	1.5+	0.5	1.4	1,3	*	
173	69	48	09A	02FK	5	5HK	2層	AN	2.3	2	0.4	2.1		*	
174	69	49	10A	01FK	5	4	SA6周辺	OB	2.24	2+	0.3	1.1	4	*	
175	69	50	10A	01FK	5	4	SA6	OB	2.15+	2.34+	0.4	1.2	2	*	
176			10A	01FK	5	5	2層	OB	2.41+	2.09	0.52	2.2	1		
177			10A	01FK	5	5	2層	OB	2.53	1.93+	0.38	1.2	3		
178			10A	01FK	5	8	2層	OB	3.1	1.99+	0.48	1.4	4		
179			10A	01FK	5	8	H	OB	1.5+	1.5+	0.35	0.6	2		
180			10A	01FK	5	2	H	OB	1.7+	1.5+	0.25	0.5	2		
181			10A	01FK	5	2	2層	OB	1.7+	2.4	0.45	1.8	1		
182	69	51	10A	03FK	7	1	725	OB	2.7	2.0+	0.28	1	3	*	
183	69	52	10A	03FK	7	1	290	OB	2	1.6+	0.3	0.7	2	*	
184	69	53	10A	03FK	7	8	H	AN	2.6	1.6+	0.35	1.3	2	*	
185	69	54	10A	03FK	7	9	225	OB	1.9+	2	0.3	0.7		*	
186			10A	03FK	7	17	H	AN	1.69+	2.14	0.33	1	1		
187			10A	03FK	7	18	48	AN	2.06+	1.98+	0.37	1.3	1,3		
188			10A	03FK	7	18	1346	OB	2.66+	2.22+	0.4	1.3	2		
189			10A	03FK	7	10	H	OB	2.4	1.3+	0.25	0.6	4		
190			10A	04FK	8	1	764	OB	2.09	1.58+	0.3	0.5	3		
191			10A	04FK	8	1	412	OB	2.21+	1.54+	0.23	0.6	2		
192			10A	04FK	8	2	172	OB	1.85+	1.3+	0.27	0.5	2		
193			10A	04FK	8	3	39	OB	2.19+	1.74+	0.3	0.6	2		
194			10A	04FK	8	1	H	OB	1.5+	1.4+	0.33	0.5	2		
195	69	55	10A	99FK	3	1	35	OB	1.8	1.4	0.4	0.6	1,3	*	
196			10A	99FK	3	2	165	OB	1.9	1.79+	0.38	0.8	4		
197			10A	99FK	3	4	32	AN	3.07+	1.66+	0.4	1.7	1,4		
198			10A	99FK	3	5	337	OB	2.23+	1.77+	0.24	0.5	3		
199			10A	99FK	3	24	H	OB	3.43	1.96+	0.48	2.7	4		
200			10B	01FK	5	8	2層	AN	2.05+	1.6+	0.41	1.5	1,4		
201			10B	01FK	5	2	H	OB	1.7+	1.9	0.25	0.8	1		
202			10B	02FK	5	5HK	2層	OB	1.59+	2.14+	0.26	0.8	1,3		
203			10B	02FK	6	4	2層	AN	3.1+	1.9+	0.39	1.4	1,3		
204			10B	02FK	6	4	H	OB	1.82+	1.79	0.38	0.9	1		
205			10B	02FK	6	4	2層	AN	2.47	1.86+	0.26	0.8	3		
206			10B	02FK	6	6	2層	OB	2.34+	1.36+	0.34	1.2	3		
207			10B	02FK	6	6	2層	OB	2.28	1.54+	0.26	0.6	3		
208	69	56	10B	03FK	7	9	314	OB	2.5	1.9+	0.3	1	3	*	
209	69	57	10B	03FK	7	18	1177	OB	3	2+	0.35	1.7	2	*	
210			10B	03FK	7	1	596	AN	1.97	1.81+	0.27	0.9	4		
211			10B	03FK	7	2		AN	2.33+	1.94	0.42	1.4	1		
212			10B	03FK	7	2	408	AN	2.07	1.67+	0.26	0.7	4		
213			10B	03FK	7	4	H	OB	2.25+	2.25+	0.35	1.4	1,4		
214			10B	03FK	7	11	81	CH	1.7+	1.2+	0.25	0.5	5		
215			10B	03FK	7	16	272	OB	2.59	1.6+	0.35	1	1,3		
216			10B	03FK	7	18	722	OB	1.77+	1.7+	0.27	0.6	1,4		
217	69	58	10B	04FK	8	5	12	OB	1.4+	1.4	0.24	0.5	1	*	
218			10B	04FK	8	4	H	OB	1.93+	1.4+	0.24	0.5	3		
219	69	59	10B	99FK	3	6	183	AN	2.1	1.9	0.3	1.1	3	*	
220			10B	FK			H	OB	3.14	2.2+	0.3	1.7	3		
221			10B	FK			H	OB	2.1+	1.7+	0.3	0.9	2		
222			10C	01FK	5	5	2層	OB	16+	1.72+	0.27	0.5	1,3		
223			10C	01FK	5	5	2層	OB	1.8+	1.8+	0.25	0.7	1,3		
224			10C	02FK	6	4	2層	OB	1.79+	2.02+	0.3	0.7	1,3		
225	69	60	10C	03FK	7	1	798	OB	2.2	1.5+	0.3	0.6	2	*	
226			10C	03FK	7	1	956	OB	1.98+	1.9	0.2	0.6	2		
227	69	61	10C	04FK	8	2	253	OB	2.8	2+	0.3	1	3	*	
228	69	62	10D	00FK	4	8	4	OB	2	1.6	0.3	0.5	2	*	
229	69	63	10D	03FK	7	16	304	OB	2.5	1.6	0.4	1	3	*	
230	69	64	10E	03FK	7	19	18	AN	2.35	2	0.4	1.4		*	
231	70	65	13A	01FK	5	1	H	OB	1.1	1.7	0.3	0.45	1	*	
232	70	66	13A	02FK	5	5KK	2層	OB	1.7	2.2	0.3	0.9		*	
233	70	67	13A	03FK	7	2	300	OB	1.9	2.6	0.55	2.3		*	
234			13A	99FK	3	5	134	OB	1.7	2.08	0.28	1.1			
235			13A	99FK	3	14	23	OB	1.03+	1.44+	2.4	0.3	1,2		
236			13B	01FK	5	5	2層	OB	1.72+	1.85+	0.27	0.7	1,3		
237	70	68	13B	02FK	5	5HK	2層	OB	1.5	1.9	0.3	0.7		*	
238			13B	02FK	5	5KK	2層	OB	1.64+	1.8+	0.28	0.6	3		
239			13B	02FK	6	4	2層	AN	1.49+	2.04	0.28	0.7	1		
240			13B	02FK	6	4	2層	AN	1.2+	1.6+	0.29	0.4	1,3		
241	70	69	13B	03FK	7	2	514	OB	1.7	2	1.5	0.6		*	
242			13B	03FK	7	1	851	OB	1.46+	2+	0.32	0.5	1,3		
243			13B	03FK	7	2	244	OB	1.38+	1.92+	0.29	0.5	1,3		
244	70	70	13B	04FK	8	4	1	OB	1.3	1.5	0.3	0.4		*	
245	70	71	13E	03FK	7	2	505	OB	1.8	1.8+	0.3	0.4	3	*	
246			14B	01FK	5	7	H	OB	1.25	1.85	0.3	0.7			
247	70	72	14B	99FK	3	6	151	OB	1.8+	1.6	0.3	0.8	4	*	
248	70	73	14B	99FK	3	15	309	OB	1.7	1.8	0.3	0.7		*	
249	70	74	14B	99FK	3	15	322	OB	1.4	2.1	0.3	0.6		*	

第29表　石鏃分類表 2

第６章　分析の記録

第１節　風観岳支石墓群の遺体埋納に関する自然科学調査

＜目次＞

はじめに
１．試料
２．分析方法
（１）リン分析
（２）脂肪酸分析
３．結果
（１）リン分析
（２）脂肪酸分析
４．考察
引用文献
＜図表一覧＞
表１　支石墓石棺と土坑のリン分析結果
表２　支石墓石棺と土坑の脂肪酸・ステロール組成

風観岳支石墓群の遺体埋納に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

風観岳支石墓群は、諫早市破籠井町の風観岳北麓に位置し、標高220mの鞍部に立地する。本支石墓群は縄文時代晩期末～弥生時代前期に相当し、支石墓の下部構造として板状石を用いた箱式石棺や土坑墓が検出されている。また、本遺跡の下方には同時期の集落跡が確認されている。

今回は、石棺内の土坑の遺体埋納を検証する目的で、ヒトを含む動物遺体に含有されるリン酸含量を測定するリン分析と、遺体に由来する残留脂肪酸について調べる脂肪酸分析を実施した。

１．試料

調査対象は、石棺の認められる支石墓２基、および土坑２基である。採取場所や層位の詳細は、結果とともに表１に示す。

２．分析方法

（１）リン分析

測定は、土壌養分測定法委員会（1981）を参考に硝酸・過塩素酸分解—バナドモリブデン酸比色法で行った。以下に、各項目の操作工程を示す。

＜試料の調整＞

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させ、風乾細土試料とする。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

＜リン酸含量＞

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約５mlを加えて加熱分解する。法令後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg／ｇ）を求める。

（２）脂肪酸分析

分析は定法（坂井ほか、1995）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。

３．結果

（１）リン分析

結果を表１に示す。

表１　支石墓石棺と土坑のリン分析結果

遺構の種類	遺　構　名	試料番号	採取場所	土性	土　　色	リン酸含量 P205(mg／g)	備考
支石墓石棺	30号支石墓(ＳＡ3)	1	床上７～10cm	ＨＣ	7.5ＹＲ３／４暗褐	3.52	礫有り
	31号支石墓(ＳＡ4)	2	床上10cm	ＨＣ	7.5ＹＲ３／４暗褐	4.74	
土　　坑	15Ｔ	3	覆　　土	ＨＣ	7.5ＹＲ３／４褐	3.10	
	41号支石墓(ＳＢ10)	4	覆　　土	ＬｉＣ	7.5ＹＲ３／４暗褐	4.13	礫有り

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）

土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性

ＬｉＣ：軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

ＨＣ：重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

以下に、遺構毎の測定結果について述べる。

＜支石墓石棺＞

試料の土性は、いずれも粘土分を多く含む重埴土である。また、土色は暗褐色である。リン酸含量は、30号支石墓（ＳＡ３）で3.52P_2O_5mg／ｇ、31号支石墓（ＳＡ４）で4.74P_2O_5mg／ｇである。

＜土坑＞

15Tは褐色の重埴土、41号支石墓（ＳＢ10）は砂をやや含む暗褐色の軽埴土である。リン酸含量は、15Tで3.10P_2O_5mg／ｇ、22Tで4.13P_2O_5mg／ｇである。

（２）脂肪酸分析

結果を図１に示す。以下に、遺構毎の脂肪酸・ステロール組成について述べる。

＜支石墓石棺＞

各試料の脂肪酸組成は、Ｃ14・Ｃ16・Ｃ18を中心に検出が目立つ。しかし、哺乳類の脳・神経・臓器に多く分布する（中野、1983）と言われる、Ｃ20：0（アラキジン酸）、Ｃ22：0（ベヘン酸）、Ｃ24：0（リグノセリン酸）などの高級脂肪酸はわずかである。

一方、ステロール組成では、試料番号１で動物由来のコレステロールと植物由来のシトステロールが見られる。また、試料番号２でコレステロールや腸内細菌に由来するコプロスタノール、植物由来のスティグマステロールやシトラステロールなどが混在する。

＜土坑＞

各土坑試料の脂肪酸組成は、支石墓石棺試料と同様に、Ｃ14・Ｃ16・Ｃ18を中心に検出が目立ち、高級脂肪酸はわずかである。

ステロール組成では、動物由来のコレステロールと植物由来のシトステロールが検出される。

４．考察

箱式石棺および土坑の埋土は、いずれも粘土分をやや多く含む。土壌中の粘土分は理化学成分を保持しやすく、粘土含量の高い土壌は外部から付加された理化学成分が残留しやすい。そのため、動物遺体が埋納されていた場合には、遺体成分が残留しやすいと推察される。

ところで、リン酸の土壌中に含まれる量、いわゆる天然賦存量は3.0P_2O_5mg／ｇ程度とされる（Bowen,1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか、1991；天野ほか、1991）。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は、5.5P_2O_5mg／ｇとの報告もある（川崎ほか、1991）。さらに、当社での分析例では、骨片などの痕跡が認められる土壌で6.0P_2O_5mg／ｇを越える場合が多い。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5mg／ｇで統一した。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。

今回調査した支石墓および土坑のリン酸含量は、いずれも天然賦存量などを大きく超える値ではない。そのため、いずれの遺構にも、リン酸の富化を認めることはできない。

一方、脂肪酸分析では支石墓および土坑で高級脂肪酸がわずかであり、動物遺体の痕跡は顕著ではない。支石墓石棺の31号（ＳＡ４）では動物由来と植物由来のステロールが混在しており、遺体の痕跡というよりは、遺構を埋積する土壌に本来含有されていた成分と見られる。

以上の分析結果から、支石墓石棺内と土坑では、いずれも遺体の痕跡を認めることはできなかった。ただし、今回の分析調査では、各遺構とも１資料を対象としているために、遺体の痕跡が残っていない場所を調査した可能性もある。そのため、今回の結果のみから、完全に埋納

を否定することはできない。

なお、遺体が埋納された場所に遺体成分が吸着・残留することが考えられ、さらに空間的にみて安置された場所に高い濃度で遺体成分が分布する事が考えられる。例えば、東京都大田区の田園調布南遺跡で検出された方形周溝墓では、主体部から天然賦存量以上のリン酸含量が見られ、周辺部ではリン酸含量が低く、埋葬位置が立体的に想定されている（中根、1992)。また、土壌中の植物遺体中に含まれるリン酸の影響を受けると、動物遺体に由来するリン酸量が数値として現れにくくなることが予想され、炭素含量も測定することが必要である。そのため、今後同様な遺構について調査する場合には、出きるだけ平面的・層位的に試料を採取し、遺体成分の分布を空間的に把握することが望まれる。

引用文献

天野洋司・太田健・草場敬・中井信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」p.28－36

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学－元素の循環と生化学－、浅見輝男・茅野充男訳、297p.博友社［Bowen,H.J.M.（1979）　*Environmental Chemistry of Elements*］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学、岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳、学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）　*SOIL CHEMISTRY*］, p.235-236

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法. 440p., 養賢堂

川崎　弘・吉田澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生環境利用技術の開発」, p.23－27

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実検書 第1巻。411p., 産業図書

中根秀二（1992）一号方形周溝墓の自然科学的分析.「田園調布南　2」, p.133－149, 都立学校遺跡調査会

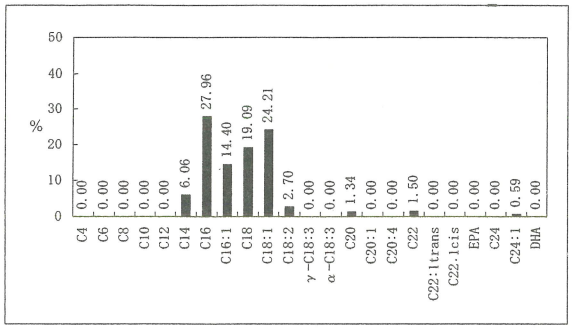
中野益男（1993）脂肪酸分析法.「第四紀試料研究法2　研究対象別分析法」, p.388－403,東京大学出版会

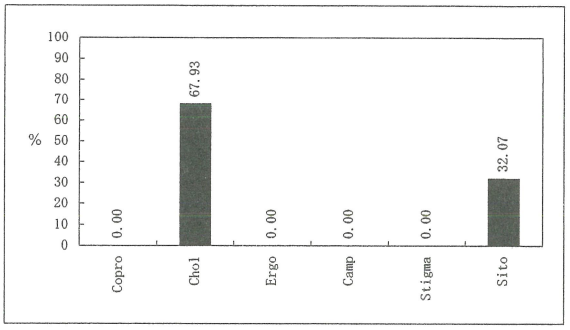
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖。

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, p.39－40.

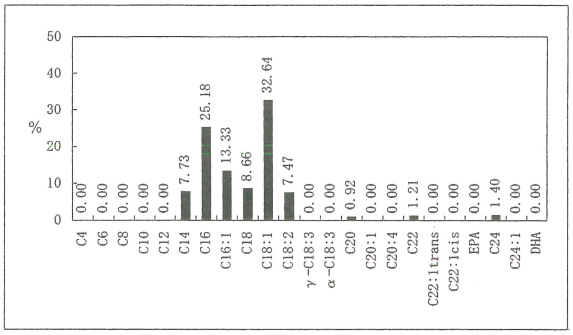
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1996）灯明皿の脂質分析。富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」, p.24－37, 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

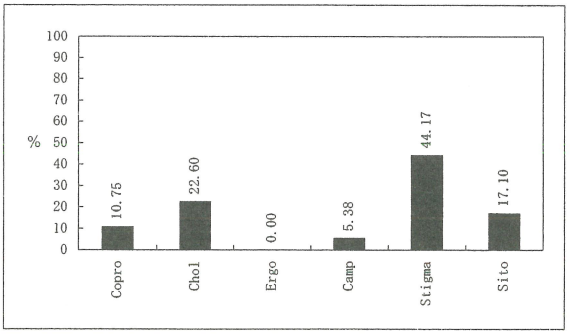
脂肪酸分析組成表



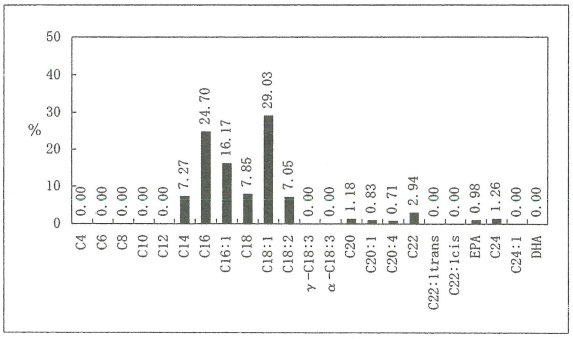


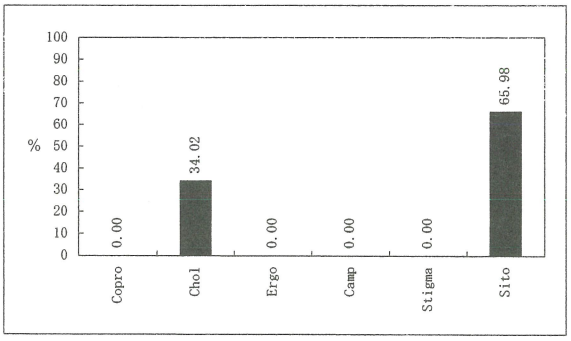
30号支石墓（ＳＡ3）試料番号1



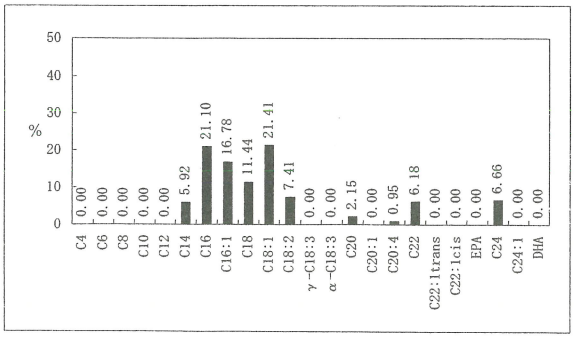


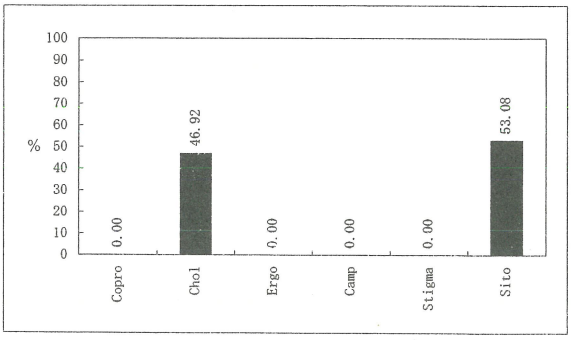
31号支石墓（ＳＡ4）試料番号2





15Ｔ　試料番号3





41号支石墓（ＳＢ10）試料番号4

図１　支石墓石棺と土坑の脂肪酸・ステロール組成

第２節　諫早市、風観岳支石墓遺跡群における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№１	７－９，pit ５内	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№２	７－10，Ｃ－50	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№３	７－10，Ｃ－88	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№４	８－６，pit １，Ｃ－24	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№５	35号支石墓（ＳＡ８） 石棺床石と土壙掘方底面の間	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№６	35号支石墓（ＳＡ８） 石棺内覆土中	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№７	26号支石墓（ＳＢ７） 土壙内覆土中	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ
№８	49号支石墓（ＳＢ20） 土壙内、Ｃ－81	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄、石墨調整	ＡＭＳ

ＡＭＳ：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

２．測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	δ^{13}Ｃ (‰)	補正^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	暦年代（西暦） （１σ:68％確率，２σ:95％確率）
№１	200640	1880±40	－29.2	1810±40	交点：cal ＡＤ 230 １σ：cal ＡＤ 140～250 ２σ：cal ＡＤ 110～330
№２	200641	2460±50	－24.8	2460±50	交点：cal ＢＣ 740, 710, 530 １σ：cal ＢＣ 770～420 ２σ：cal ＢＣ 790～400
№３	200642	2500±50	－26.3	2480±50	交点：cal ＢＣ 760, 680, 550 １σ：cal ＢＣ 780～500, 460～430 ２σ：cal ＢＣ 790～410
№４	200643	1730±40	－26.9	1700±40	交点：cal ＡＤ 370 １σ：cal ＡＤ 260～290, 320～400 ２σ：cal ＡＤ 240～420

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C年代 (年ＢＰ)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年ＢＰ)	暦年代（西暦） （１σ:68％確率，２σ:95％確率）
No.5	213231	3270±40	−27.3	3230±40	交点：cal ＢＣ 1500 １σ：cal ＢＣ 1520～1440 ２σ：cal ＢＣ 1600～1420
No.6	213232	2460±40	−26.1	2440±40	交点：cal ＢＣ 520 １σ：cal ＢＣ 760～680, 550～410 ２σ：cal ＢＣ 770～400
No.7	213233	1050±40	−26.7	1020±40	交点：cal ＡＤ 1010 １σ：cal ＡＤ 990～1030 ２σ：cal ＡＤ 970～1040
No.8	213234	2510±40	−27.5	2470±40	交点：cal ＢＣ 750, 700, 540 １σ：cal ＢＣ 770～500, 460～430 ２σ：cal ＢＣ 780～410

（１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（ＡＤ1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（２）δ（デルタ）^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのＵ−Ｔｈ年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記され

る場合もある。

３．所見

加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定の結果、
№１の炭化物では1810±40年ＢＰ（１σの暦年代でＡＤ140～250年）、
№２の炭化物では2460±50年ＢＰ（同ＢＣ770～420年）、
№３の炭化物では2480±50年ＢＰ（同ＢＣ780～500, 460～430年）、
№４の炭化物では1700±40年ＢＰ（同ＡＤ260～290, 320～400年）、
№５の炭化物では3230±40年ＢＰ（同ＢＣ1520～1440年）、
№６の炭化物では2440±40年ＢＰ（同ＢＣ760～680, 550～410年）、
№７の炭化物では1020±40年ＢＰ（同ＡＤ990～1030年）、
№８の炭化物では2470±40年ＢＰ（同ＢＣ770～500, 460～430年）の年代値が得られた。
このうち、№２と№３、№６、№８では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の暦年代較正曲線が不安定なためである。

文献

Stuiver et al.（1998）, INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, ｐ.1041－1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, ｐ.1－36.

Beta－200640

(Variables: C13/C12=-29.2:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-200640**

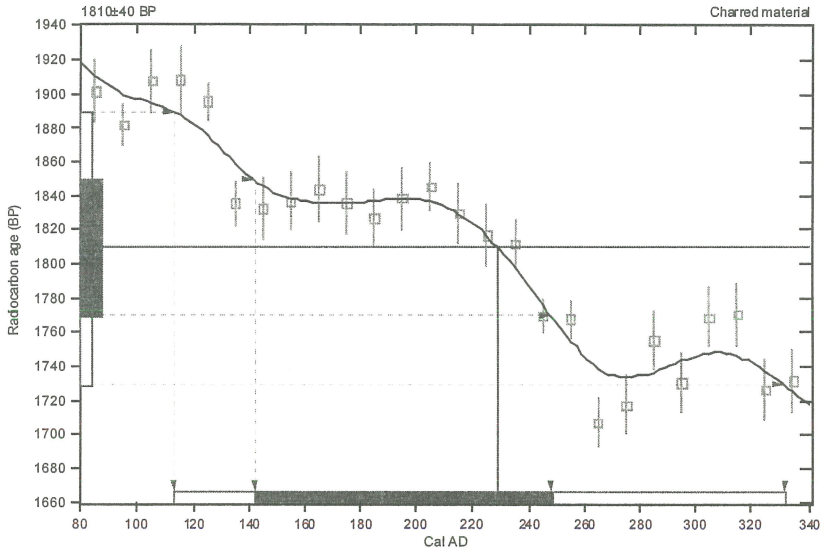
Conventional radiocarbon age: **1810±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal AD 110 to 330 (Cal BP 1840 to 1620)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 230 (Cal BP 1720)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 140 to 250 (Cal BP 1810 to 1700)
(68% probability)



Beta－200641

(Variables: C13/C12=-24.8:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-200641**

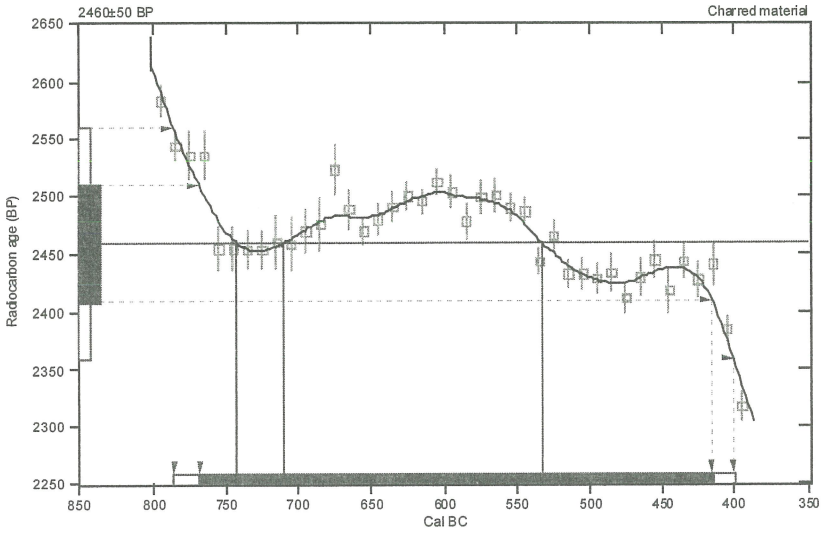
Conventional radiocarbon age: **2460±50 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 790 to 400 (Cal BP 2740 to 2350)**
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 740 (Cal BP 2690) and
Cal BC 710 (Cal BP 2660) and
Cal BC 530 (Cal BP 2480)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 770 to 420 (Cal BP 2720 to 2370)
(68% probability)



Beta－200642

(Variables: C13/C12=-26.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-200642**

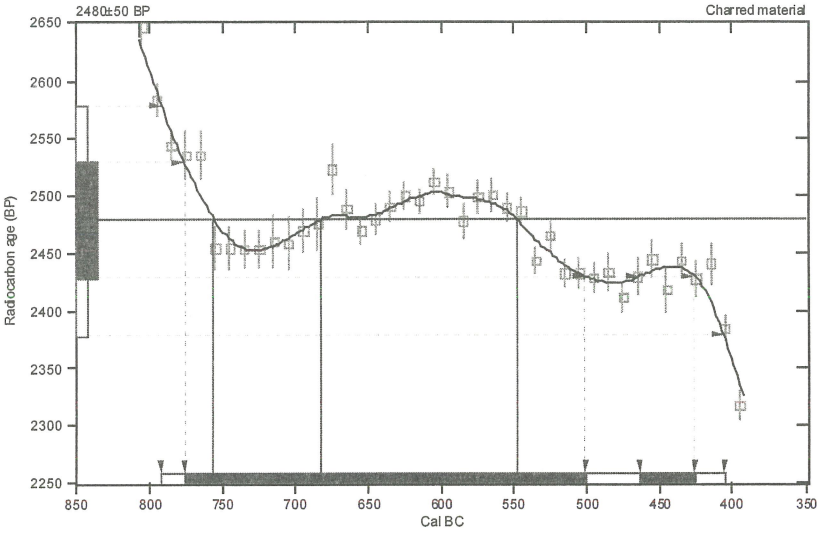
Conventional radiocarbon age: **2480±50 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 790 to 410 (Cal BP 2740 to 2360)**
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 760 (Cal BP 2710) and
Cal BC 680 (Cal BP 2630) and
Cal BC 550 (Cal BP 2500)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 780 to 500 (Cal BP 2730 to 2450) and
(68% probability) Cal BC 460 to 430 (Cal BP 2410 to 2380)



Beta－200643

(Variables: C13/C12=-26.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-200643**

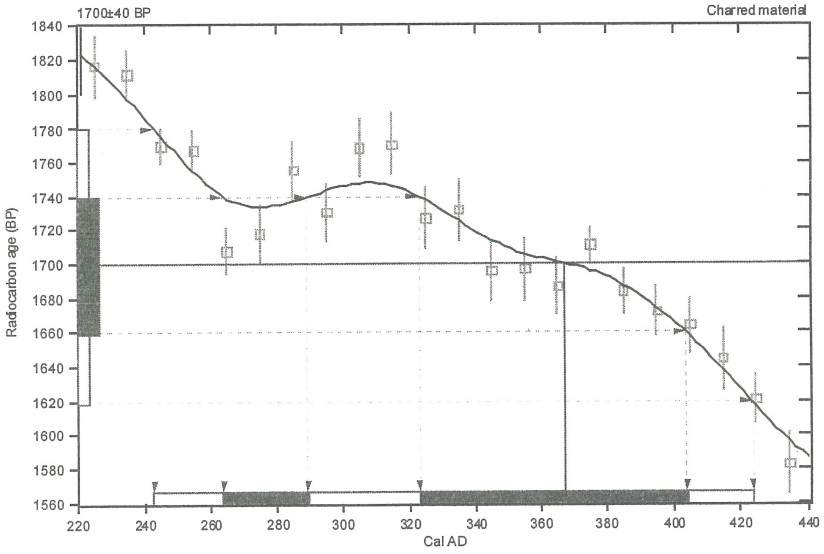
Conventional radiocarbon age: **1700±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal AD 240 to 420 (Cal BP 1710 to 1530)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 370 (Cal BP 1580)

1 Sigma calibrated results: Cal AD 260 to 290 (Cal BP 1690 to 1660) and
(68% probability) Cal AD 320 to 400 (Cal BP 1630 to 1550)



Beta−213231

(Variables: C13/C12=-27.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-213231**

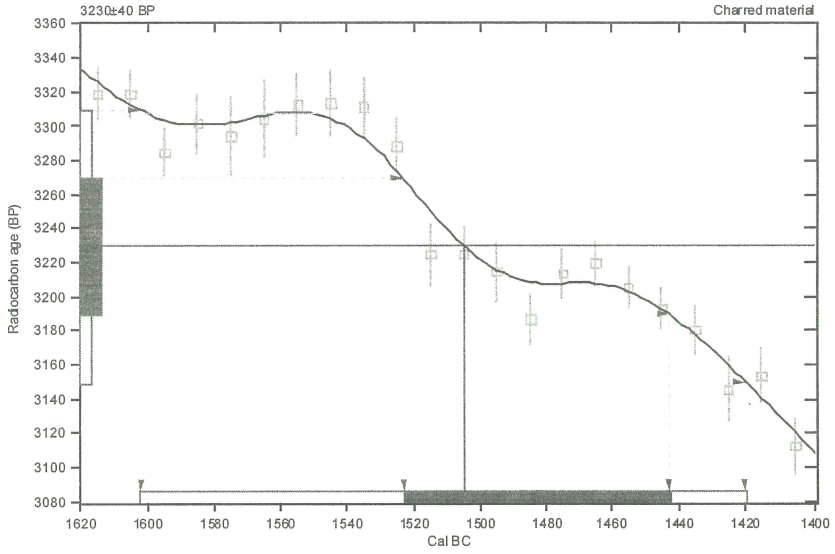
Conventional radiocarbon age: **3230±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1600 to 1420 (Cal BP 3550 to 3370)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 1500 (Cal BP 3460)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1520 to 1440 (Cal BP 3470 to 3390)
(68% probability)



Beta−213232

(Variables: C13/C12=-26.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-213232**

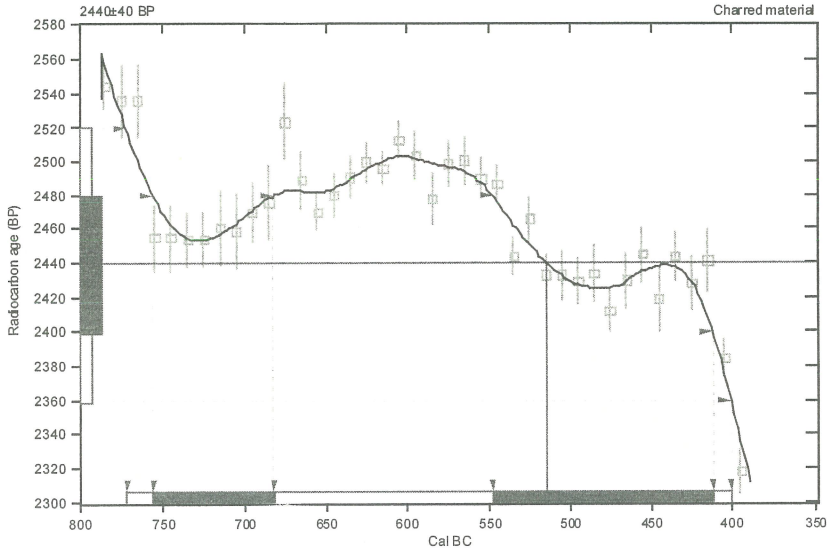
Conventional radiocarbon age: **2440±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 770 to 400 (Cal BP 2720 to 2350)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 520 (Cal BP 2460)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 760 to 680 (Cal BP 2710 to 2630) and
(68% probability) Cal BC 550 to 410 (Cal BP 2500 to 2360)



Beta—213233

(Variables: C13/C12=-26.7:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-213233**

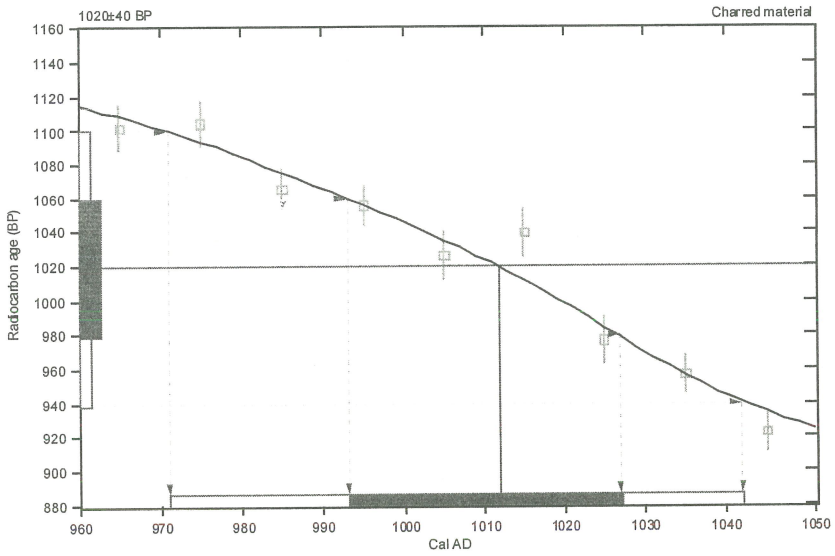
Conventional radiocarbon age: **1020±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal AD 970 to 1040 (Cal BP 980 to 910)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 1010 (Cal BP 940)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 990 to 1030 (Cal BP 960 to 920)
(68% probability)



Beta—213234

(Variables: C13/C12=-27.5:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-213234**

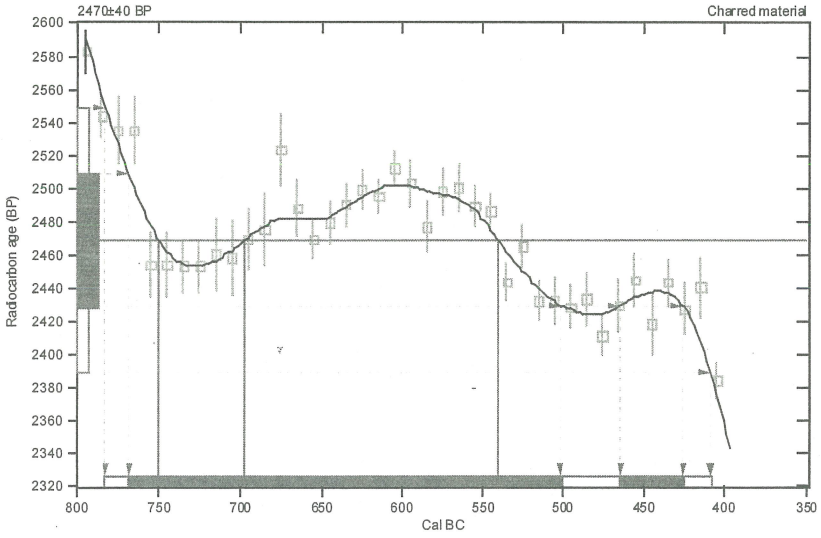
Conventional radiocarbon age: **2470±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 780 to 410 (Cal BP 2730 to 2360)**
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 750 (Cal BP 2700) and
Cal BC 700 (Cal BP 2650) and
Cal BC 540 (Cal BP 2490)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 770 to 500 (Cal BP 2720 to 2450) and
(68% probability) Cal BC 460 to 430 (Cal BP 2410 to 2380)



第７章　総　　括

第１節　支石墓について

風観岳支石墓群は６支群に分かれ、支群（地点）別に整理すると第１表のようになる。

表中、「上石」とした欄は支石墓の上石として実測を済ませ、上石を移動して下部構造を精査したものの、支石、蓋石、内部主体などの下部構造を確認できなかったもので、上石近傍に下部構造の存在の蓋然性が高いものを計数し、支石墓群の全体像を想定するために設定したものである。上石様の石材は板状に剥離する玄武岩であり、本文中において既述したＦ地点玄武岩露頭から切り出されたと想定されるものである。これによると全体で100基を超える規模となる。調査では視認できた支石墓のみを調査しており、表土下に埋没している例も多く存在すると想定され、実数はかなりの規模に上ることが予想される。支群は大きいもので30基を越す見込みで、原山遺跡（注１）や大野台遺跡（注２）、久保泉丸山遺跡（注３）などと比肩する支石墓群となろう。

地点(支群)	石　棺	土　壙	不　明	小　計	上　石	計	丹塗り土器
A	0	5	0	5	24	29	
B	1	1	2	4	0	4	
C	11	3	2	16	2	18	◎
D	8	14	1	23	15	38	◎
E	3	1	4	8	0	8	◎
F	0	1	0	1	4	5	◎
計	23	25	9	57	45	102	

第１表　風観岳支石墓群地点（支群）別一覧表

ー１．支群と変遷

本支石墓群は６支群で構成され、それぞれ内部主体が石棺と土壙となっている。支群における構成割合は石棺が多く存在する群、土壙が石棺を凌駕する群と様々であり一定していない。Ａ・Ｆ地点で石棺が確認されていないのは、後世の撹乱によると思われるが、この比率は往時の状況をある程度表象していると思われる。第１表の右欄に「丹塗り土器」欄を設けているが、これは丹塗り土器が検出された地点を示しており、Ｄ地点51号支石墓（ＳＢ23）のように土器棺を埋納する土壙が存在する可能性を想定しているためである。

６支群の変遷については、まず支群内の変遷から検討したい。Ｄ支群（地点）では石棺の周囲に土壙が立地しており、いかにも新旧の差を示しているようである。しかし内部主体から出土した供献土器は31号支石墓（ＳＡ４）の第52図74はⅢＡ$_1$類に、第54図125はⅢＡ$_1$類又はⅢＢ$_1$類、あるいはⅢＤ$_1$類に比定され、38号支石墓（ＳＢ４）の第57図175はⅢＤ$_1$に比定される。これらの土器はいず

支　群	種　別	風観岳	原　山	大野台	丸　山
A	石　棺	0	1	20	1
	土　壙	5		0	17
	その他	0	10	0	2
B	石　棺	1	1	4	0
	土　壙	1		0	34
	その他	2	26	0	1
C	石　棺	11	30	8	0
	土　壙	3	17	0	7
	その他	2	3	2	0
D	石　棺	8			1
	土　壙	14			33
	その他	1			0
E	石　棺	3		32	0
	土　壙	1		0	22
	その他	4		6	0
F	石　棺	0			
	土　壙	1			
	その他	0			
不　明	石　棺				1
	土　壙				5
	その他				1
計		57	88	72	125

第２表　風観岳支石墓群ほか地点（支群）別一覧表

れも本遺跡Ⅱ期（第２節で後述）の所産である。また隣接する51号支石墓（ＳＢ23）の土壙内の土器棺（第61図219)、49号支石墓（ＳＢ20）に伴うと思われる壺口縁部（第61図221）もⅡ期に属するもので、同時期の造営と思われる。さらにＣ地点では石棺と土壙が不分離の状態で検出されており、必ずしも立地の違いが時期差を示すものではないようである。Ｃ支群の7号支石墓上石下出土土器（第48図６、８）もＤ支群と同じⅡ期の所産であり、群間の時期差も明確には捉えられないようである。ただ、石棺が土壙に先行するであろうと想定され、事実原山支石墓においては第100号（石棺）と第112号支石墓（土壙）の重複関係に時間差を認めることができよう。以上により支群内での内部主体による時間差はわずかながらも想定され、石棺が土壙に先行するものと思われる。また石棺間でも前後関係（30～32支石墓）が認められるが、構造上の相違点は少なく、短期間のうちに造営されたものであろうと推察される。また支群間での推移は認め難く、ほぼ同時期に支石墓の造営がなされたものと推察される。そして支石墓造営の終焉もＡ地点を除く各支群において丹塗り土器が検出されていることから、ほぼ同時期に終息したものと推察される。

ー２．内部主体と上石

内部主体には石棺と土壙がある。石棺の法量は長軸が１ｍを超すものは７号支石墓のみで、他は50～90cm内である。幅は50cmまでであり、長方形状を呈す。棺深は7号支石墓が60cmを測る他は30～40cm内外である。石棺の石材は薄く剥がした玄武岩の板石を使用して長方形に組んでいる。また同様石材で蓋をして閉塞している。この段階で埋葬行為が終了したと考えられるのであるが、さらに蓋石の上には盛土せず直に支石を配置し上石を載せて終了している。

もうひとつの内部主体である土壙は、法量は石棺に比べ一回り大きい。長さに対して幅のあるものが多く、よって方形状を呈するものが石棺より多くなっている。棺深は全体的に浅く、20～30cmに収まるものが多い。これらの点が石棺と大きく異なっている。また、主体部の閉塞に採用された石蓋に相当するものが見られない。石蓋によると思われる例はＣ地点27号支石墓（ＳＢ９）に確認されるのみである。22号、26号支石墓（ＳＢ３、ＳＢ７）などでは上石下に安山岩の小礫や風化礫が確認されており、木蓋などを利用して閉塞したことが想定される。この場合も支石は木蓋の上に据えており26号支石墓（ＳＢ７）や44号支石墓（ＳＢ15）で確認できる。そして支石の上に上石を載せ、石棺と同様この段階で埋葬行為が終了している。

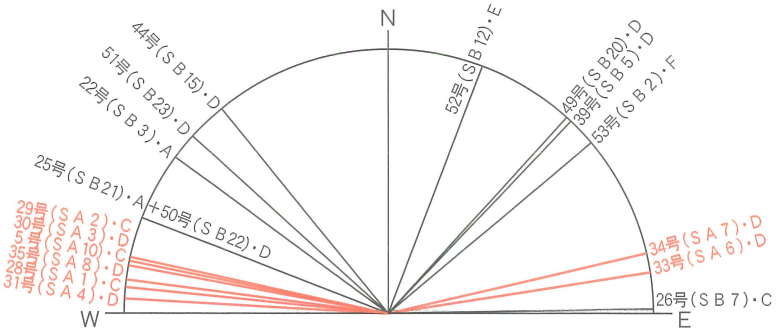
以上のように石棺の場合は全て蓋石で閉塞して被葬者の保護を行っている。しかし土壙の場合は木蓋に依っていると見られ、被葬者保護の観点からは石棺と比べて手薄い処理を行っている。換言すれば上石が存在しなければ猛禽類などによる掘り返しや遺体の損壊が起こる重篤な状態であると言える。

このため上石の設置は、前記被害の未然防止のためと、共同体の墓地利用の継続性のために設置されたものである。かつ上石の設置は墓地内における共同体構成員の埋葬地の所在の目印として上石が機能したことを示している。すなわち標石である上石設置で埋葬・葬送行為が終

了するのであるが、この上石の存在により支石墓が互いに重複することなく営まれ、累積墓としての支石墓群が残されたのである。

ー３．支石墓の方位

では造墓の結果として累積した内部主体の方位はどうであろうか。上石のみが視認可能であった往時の支石墓の造墓に方向性があったのかどうかを見てみる。

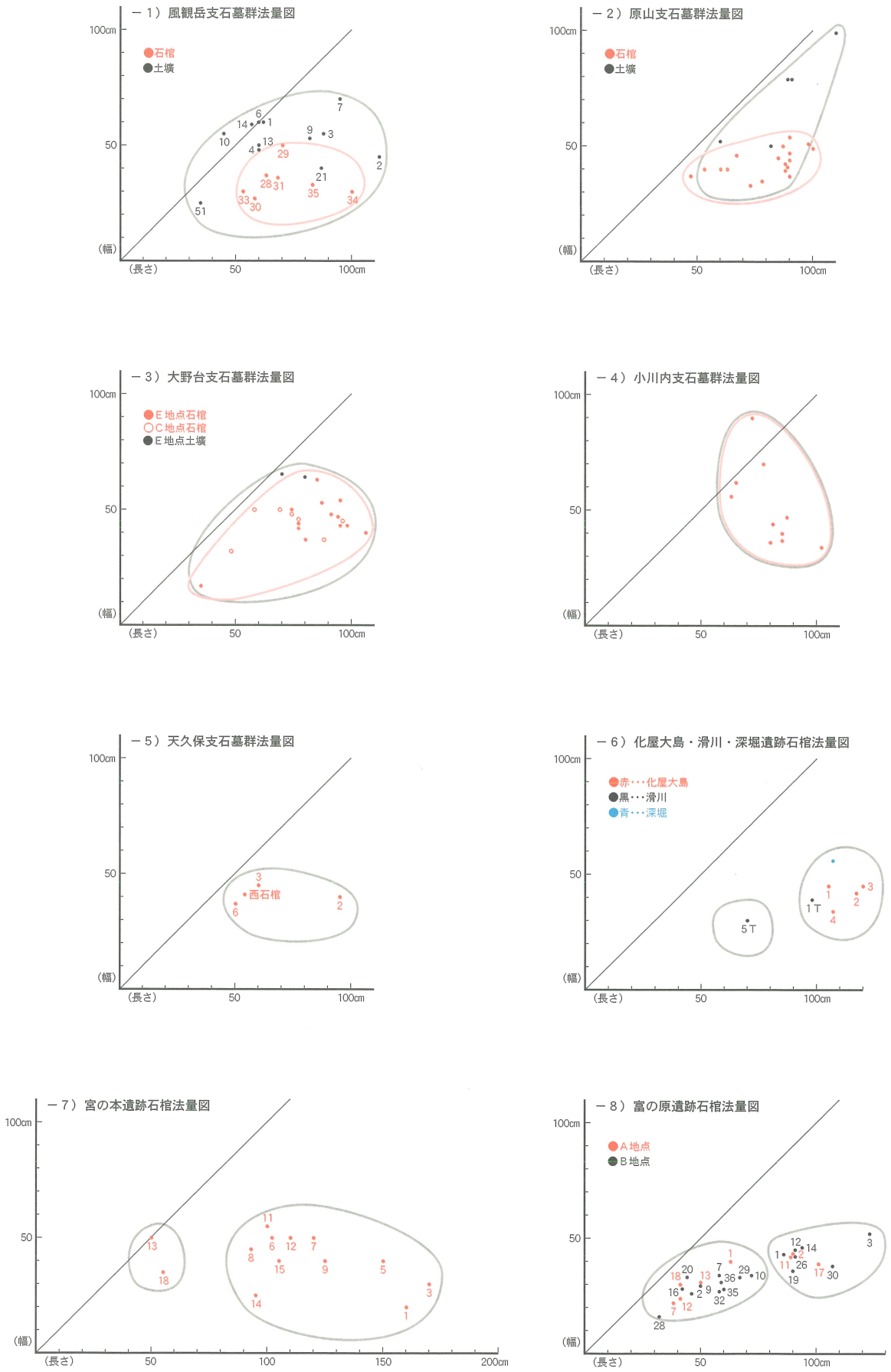


第１図　内部主体主軸グラフ（支石墓番号（石棺・土壙別）・地点）

第１図に内部主体の長軸を示している。土壙の場合方形状に近い例が多いため、形状が確実に把握できるものを採用している。石棺はＣ地点、Ｄ地点ともに東西位を示しており、統一性が認められる。また土壙は26号支石墓は東西位を十分に意識して造墓している。しかし、他の土壙は北東位～北西位を示しており、明確な方向性を見出しにくいが、Ｅ地点の52号支石墓を除けばほぼ東西位を意識していると考えられる。

ー４．内部主体の法量

次に内部主体である石棺と土壙の長・短軸をグラフ化したのが第２図である。県内における突帯文期に属する支石墓の石棺は長さや幅が狭く、深さがやや深い点において特徴がある。またこの傾向は弥生時代の石棺墓にも引き続いて採用されており、本県においては息の長い葬法であると言えよう。本支石墓群34号支石墓（ＳＡ７）や小川内第４号支石墓が102cmを測るほかは50～100cmに収まっている。また幅に関してはその多くが50cmを超えない範囲内に集約されている。一方、土壙は石棺を一回り大きくした法量を持つ点、他の支石墓群と一致した傾向を見せている。この一極に集中する傾向を見せた内部主体に、二極化の傾向を示し始めるのが、中期前後の頃である。第２図－６に化屋大島遺跡（注４）と滑川遺跡（注５）、深堀遺跡（注６）の石棺の法量を示したが、１～1.2mの群と70cmの群に分かれる傾向を示している。この傾向はその後も継続し、宮の本遺跡（注７）、富の原遺跡（注８）に引き継がれる。また出津遺跡（注９）では縄文時代から弥生時代にかけての石棺で壮年女性の屈葬人骨が検出されており、長さ90cm以上の石棺であれば強度の屈葬で成人が埋葬可能であることを示している。宮の本遺跡では50cm内外を測る13号石棺からは幼児人骨が、18号石棺からは小児人骨が検出され、１ｍを越す石棺からは屈葬あるいは屈肢葬の成人人骨が検出されている。富の原遺跡ではＡ・Ｂ２地点の墓域が検出され、いずれの地点からも石棺と甕棺が混在して検出されている。石棺の法量は二極化しているものの、地点による異同は認められない。宮の本遺跡例からすると、小児用と成人用の石棺と思われる。石棺から遺物の検出がなく時期の特定が困難であるが、分布状況などから中期前半から後期初頭前後の時期まで存続したと見られている。



第２図　各遺跡内部主体法量図

以上県内の石棺の状況を瞥見したが、少なくとも本県においては弥生時代全般を通じて石棺葬が行われており、古墳時代に継続していく普遍的な葬法であることが了解される。そして中期の初頭前後において石棺の二極化が始まり、以降古墳時代まで引き継がれていく。

ー５．内部主体の覆土

では、二極化する以前、すなわち突帯文期の石棺や土壙の被葬者は成人であろうか、あるいは小児であろうかという問題が惹起されてくる。ここで本遺跡30号・31号・35号支石墓の石棺内埋土の状況を見てみたい（図版54～57）。第20図に30号石棺の覆土堆積状況を掲載している。石蓋を取り除くと石棺の天端付近まで覆土が充填していた。覆土は１層が明茶褐色の粘質土で流れ込んだ土で汚染されている。２層は同色調の粘質土で層相は１層に似るが、より締まっている。３層との間に堆積したもので、人為を窺わせるような堆積状況である。このように覆土は地山である安山岩風化土で、石棺構築に際して掘削された土壙から出た土であり、２層以下には安山岩の風化礫が包含されている状況であった。石棺内の覆土は棺外からの流入による自然堆積ではなく、明らかに再埋土したものであることが、２～３㎝大の多くの安山岩風礫の存在により了解された。第24図は35号支石墓で、覆土は水平堆積に近く、２層以下が再埋土されたものである。２層以下には２～３㎝大の凝固度のやや低い安山岩風化礫を含んでいる。このように石棺の覆土は明らかに地山の土を再度埋め戻したものであり、石棺の容積の８～９割は埋土されたものであり、その葬法の特異なことが注意された。この棺内への再埋土現象は全てではないが土壙の覆土でも観察され、本遺跡においては普遍的な葬法であったことが窺われた。

ー６．内部主体の被葬者

内部主体の容積の８～９割を再埋土で充填されていた事実は、どのように解釈すべきであろうか。ひとつは棺内に被葬者を納棺しなかったという理解と、他方では遺体という状態では納棺しなかったかの理解である。石棺あるいは土壙を石蓋あるいは木蓋で閉塞し、上石を据えて埋葬儀礼が終了していることを考慮すると前者の理解は困難であり、後者の理解が合理的であろう。では遺体の状態で納棺が不可能であれば、どのような処理を施したのであろう。この疑問に資料を与えてくれるのが、縄文後期から出現する埋甕である。本県でも80例ほどを挙げることができ、本遺跡近傍の下峰原遺跡（注10）でも晩期中頃の例が２件検出されている。ともに深鉢の底部を打ち欠いて直立させている。１号埋甕の覆土は上位が暗茶褐色粘質土、下位が茶褐色粘質土で充填され、日用品を転用したのであろう土器内面には炭化物が付着していた。また土壙との充填土中には炭化物粒子を含む暗茶褐色土が充填され、２号埋甕とともに一次葬後の遺骨を埋納したのであろうと思われた。この場合被葬者が成人であるのか、小児であるかの判断は遺存人骨が検出されないため不明であるが、必ずしも小児のみを埋葬の対象としたとは限らないことは推察される。筏遺跡（注11）では多くの埋甕は確認されるものの土壙墓の存在は明確でなく、また楠田遺跡（注12）では住居域近接の墓域からは土壙墓のみが検出される

という具合にである。このように検出された埋甕が成人をも埋葬する風習が存在したことは容易に想像でき、その場合は火葬などを行って遺骨を処理・埋納する二次葬であった可能性が強い。このことについては早くから橋口が指摘しているとおりである（注13）。この晩期中葉まで本地域で行われた火葬による二次葬の習俗が風観岳支石墓群に採用された可能性が高く、これが内部主体の狭小さを出現させた大きな要因であろうと推察されるのである。このことは内部主体への再埋土による埋葬空間の狭小さが証明している。以上により風観岳支石墓群の被葬者は火葬などの処理を受けた人骨を埋納した二次葬であろうと思われる。葬送の型式としては最新の支石墓を導入しながらも、葬送の風習としては旧習に倣って造墓された点において他地域の支石墓と際立った違いを見せると評価できよう。この旧習に倣う葬法で県下（離島部を除く）の支石墓群は造営されたと見られ、狭小な内部主体を持つという共通性はその証明であろう。そこには強い規制や規範あるいは宗教というものが広範囲に展開を見せていたことを想定させ、その例示のひとつとして支石墓を取り上げることができよう。

注１　日本考古学協会西北九州綜合調査特別委員会「島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）及唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10　1960
　　森貞次郎「島原半島の考古学的調査第二次概報（５．原山遺跡）」『九州考古学』14　1962
　　北有馬町教育委員会『国指定支石原山支石墓群環境整備事業報告書』1981
注２　大野台遺跡調査団「大野台遺跡―縄文晩期墳墓群の調査―」『古文化談叢』第１集　1974
　　長崎県鹿町町教育委員会「大野台遺跡」『長崎県鹿町町文化財調査報告書』第１集　1983
注３　佐賀県教育委員会「久保泉丸山遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』（５）1986
注４　多良見町教育委員会「化屋大島遺跡」『多良見町文化財調査報告書』第２集　1974
注５　平成17年度畑耕作中に石棺が出土し、確認調査を実施した。石棺内からは化屋大島２号石棺と同一視できる小型壺が副葬されていた。報告書は平成18年度刊行予定である。
注６　長崎県教育委員会「深堀遺跡調査報告　昭和41年度」『長崎県文化財調査報告書』第５集　1967
注７　佐世保市教育委員会「宮の本遺跡」『佐世保市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年度』1980
注８　大村市教育委員会「富の原」『大村市文化財調査報告書』第18集　1987
注９　外海町教育委員会「出津遺跡」『外海町文化財調査報告書』第１・２集　1982･1983
注10　諫早市埋蔵文化財調査協議会『下峰原遺跡』1998
注11　百人委員会『筏遺跡』1974
注12　福岡県教育委員会「楠田遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　49』　1998
注13　橋口達也編「石崎曲り田遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集　1983など

第２節　土器について

ー１．出土土器の分布と傾向

調査で出土した縄文時代から近世までの土器系の遺物は3,500点余りであるが、その96％を縄文晩期の土器が占めていると判断される。また晩期より古い縄文土器は図示できたものが３点にとどまっている。出土量を地点別に分けると、Ｄ地点からの出土が全体の92％であり、Ａ地点が2.4％、Ｂ地点0.1％、Ｃ地点1.9％、Ｅ地点1.8％、Ｆ地点1.6％の割合となっている。

口縁を含まない破片について、晩期前半（刻目突帯文出現以前）の土器か、後半（刻目突帯

文出現以後）の土器かを判別するのは困難であるが、口縁部の出土傾向からは、晩期の土器と判断した土器のうち、前半に属すると思われる土器は、10％に満たないものと推測される。従って、本遺跡で出土した縄文晩期土器の大部分が、晩期後半に属すると思われる。晩期前半の土器はＡ・Ｃ・Ｄ・Ｆ地点で出土しており、特に標高の高い位置にあるＡ・Ｆ地点では　刻目突帯文土器が出土しておらず、ほぼ晩期前半の土器のみの出土と判断される。Ｄ地点においては、晩期前半の土器の出土もかなり見られるが、圧倒的に刻目突帯文土器の出土が多い。Ｅ地点はＤ地点についで、刻目突帯文土器の出土量が多い地点であるが、絶対量は少ない。以上のような傾向を、概観的に述べると、晩期前半の土器は遺跡全体に広く薄く分布し、晩期後半の土器の大部分はＤ地点に集中して出土し、一部がＥ地点に、またわずかにＢ地点にも分布していると言えるだろう。

当遺跡で出土した、ほぼすべての晩期の土器破片について、胎土に「角閃石」を含むものと「雲母」を含むものとに分け、その比率を試算している。その際「角閃石」を含まなくても、火山性の土壌に起因する砂粒の含有が推定される場合は、「角閃石を含む土器」に算入し、一方「雲母」と「石英」はほぼセットで含まれているので、「雲母」が見えなくても、「石英」が含まれている場合は「雲母を含む土器」に数えている。なお集計の途中で「雲母」・「角閃石」両方をふくむ土器片の存在がわかったが、小数であるためと、集計の混乱を避けるため、分離せず、「雲母を含む土器」に数えている。

試算の結果「角閃石」を含む土器の割合は73％、「雲母」を含む土器の割合が27％となった。この結果に関連する状況としては、晩期前半と思われる土器のほぼ全てが「角閃石」を含む土器であると推定されること、刻目突帯文土器のうち指頭による刻みを付けた甕・鉢類に、「雲母」を含む土器がないことが挙げられる。指頭による刻みの技法が、刻目突帯文土器の古い時期にのみ行われたとすれば、当遺跡における「雲母を含む土器」の使用は刻目突帯文土器の初期の段階より、やや遅れて始まったと推定することができる。

現段階では、当遺跡内及び近辺での土器の生産は考えにくく、出土したほとんどの土器は他地域から、交易や他の手段で入手したものと考えている。あくまでも推定の域を出ないが、「角閃石」を含む土器の入手先（生産地）としては、火山性の地質の多い島原半島や熊本県方面が、「雲母」を含む土器は佐賀県・福岡県の花崗岩のある地域が想定されるのではないだろうか。当遺跡出土の刻目突帯文土器の多様性を見ると、各々の生産地の違いや、入手時期の差を反映しているように思えてならない。角閃石と雲母の両方を含む土器については、もともと粘土そのものに２種の成分が含まれていたのか、意識的に石英粒・雲母を混入した結果なのか等の解明は今後に残された課題と思われる。

丹塗り土器片については、角閃石と雲母の含まれ方についての分類が完了している。８次にわたる調査によって、当遺跡から出土した丹塗りの土器片は132点（ごく細片まで集計しているので、数点の誤差はある）であり、そのうち角閃石を含むものが21点（20％）、雲母を含むものが97点（73.6％）、両者を含むものが14点（10.9％）であった。先に述べたように、土器全

体における角閃石を含む土器の割合は73％であったので、ちょうど正反対の比率となっている。このような結果の解析については、今後の研究課題の一つになると思われる。

ー２．突帯文土器とその他の土器

本遺跡出土土器の全体的な傾向については前項のとおりであるが、縄文晩期後半の突帯文土器に先行する土器群が一部見られるのみで、後続する土器型式は認められない。ここでは出土土器の量が最も多いＤ地点から検討を加え、次に他地点を検討する。

Ｄ地点出土土器は深鉢、甕、浅鉢、鉢、高坏（台付鉢）、組織痕土器、壺、土製品と、他の地点に比べ豊富な器種が確認されたが、量的に多いのが貼付突帯文の甕と鉢である。そこで突帯文土器について少し検討を加えてみよう。突帯文土器は破片数で143点（甕と鉢を参入）確認された。土器は破損の仕方によって２分割するもの、４分割するものなどその割れ方は様々であり、統計として使う数値の不安定さはぬぐいきれないが、１個体として認識できる資料が存在しないため、敢えて数値の整理を行ってみた。143点の突帯文土器は胎土によって３分類される。角閃石を含むものが116点で全体の81％を占め、雲母を含むものが23点・16％、角閃石と雲母の両者を含むもの５点・３％で構成されている。

まず突帯文土器の分類であるが、藤尾分類を援用している（注１）。口縁部の突帯と施文の有無、さらに肩部の突帯と施文の有無により細分した。これに突帯への刻目施文法と施文具の要素を加味すると第１表のように分類でき、藤尾分類に比定すると同表右欄のようになる。この表では刻目突帯文での分類を行ったのでⅠ類は掲載していないが、第49図１～10を挙げることができる。またⅡ類である深鉢形の胴部で口縁部に刻目突帯を有する甕の弁別が困難で、Ⅲ類に包含されていると想定される。資料の多くを占めるのがⅢＡである。口縁部突帯による類別でみると、施文法では刺突・52点と押引・13点があり、刺突52点の施文具はユビあるいは指頭によるものが７点、棒状工具によるものが36点で、以下板、うす板、竹管となる。押引手法では板あるいはうす板の施文具で占められる。このⅢＡとしたものには施文法の違いによって刺突・A_1と押引・A_2に細分される。さらに肩突帯による分類では刺突32点、押引14点。刺突32点の施文具の内訳はユビ８点、棒状22点、うす板２点。押引14点の施文具は板によるもののみで占められる。このように口縁部あるいは肩部での突帯施文の類型は相似しており、口縁部と肩部に突帯を有する２条甕であるⅢＡの可能性が高いもので占められている。ただ破片数を見てみると口縁部と肩部の押引の数は一致するものの、刺突では20個の差があり、口縁部に突帯を持つものが多くなっている。これは前述したⅡ類の欠如を補う可能性があるものである。よって、ⅢＡ類として分類した中にⅡ類が含まれていると想定される（表には（＋$Ⅱ_1$又は＋$Ⅱ_2$）と表示）。以上は胎土に角閃石を含む資料での施文法・施文具についての検討であるが、雲母を含むもの、角閃石と雲母の両者を含むものも相似た様相を示している。ただ角閃石を含むもの以外の資料では、雲母を含む資料に施文法で押引を行うものがない点と、雲母と角閃石を含むものに施文具でユビによるものが確認されない点が注意される。そこで施文具の動態を

菜畑遺跡（注２）で見る（百分比）と、９－12層：８層下：８層上では、ユビが46：13：０、棒状が27：３：０、条痕原体が９：３：３、ヘラ（押引と想定）が18：79：90、ハケが０：０：６の傾向を示し、施文法としては刺突から押引、施文具はユビから棒状へと推移し、ハケへと移る変化が読み取れる。

次に本遺跡出土資料で、口縁部突帯貼付位置（Ａは口縁部から離れて貼付するもの、Ｂは口縁部直下に貼付するもの、Ｃは口縁端部に接するもの）の違いによる施文法と施文具（ユビ：棒：板：うす板の百分比）の分類（第２表）では、施文法・刺突でＡは26：59：７：７、Ｂは０：70：10：20、Ｃは０：86：７：７（竹管）となる。施文法・押引ではＡ・Ｂ・Ｃともに板またはうす板で占められる。これにより施文法として刺突から押引に変化し、また施文具はユビから棒状を経て板状に変化する。これは口縁部突帯の貼付位置にも対応しＡからＣへ変化するようである。また押引施文では板とうす板のみの施文具であり、この施文具が刺突法にも含まれていることは、刺突による施文法がユビと棒状、板とうす板に弁別されるものの、より近時的な様相を示していると想定される。ⅣＢ類としたものは如意状に口縁部が外反するもので、口縁端部全面に刻目を施す。棒状工具による刺突施文である。胎土は角閃石を含むもののみに見られ、突帯文期の古期に属するものである。類例として高田小生水遺跡（注３）第Ⅲ地区下層出土土器の中に、口縁部に鰭状突起を有する刻目突帯文の深鉢とともに出土している。

以上、Ｄ地点出土刻目突帯文の甕形土器について検討した。これを基に風観岳支石墓群の時代区分をⅠ～Ⅲ期と設定する。即ちⅠ期は突帯文期以前とし、Ⅱ期は刻目突帯文土器のうちⅡ$_1$、ⅢＡ$_1$、ⅢＢ$_1$，ⅢＣ$_1$、ⅣＢなど施文法に刺突を採用しているもので、施文具としてはユビや棒状工具によるものがほとんどを占める時期である。次にⅢ期としたものは押引による施文を主体とするもので、Ⅱ$_2$、ⅢＡ$_2$が挙げられる。

以上、深鉢、甕について瞥見したが、次にその他の器種について見てみたい。浅鉢183～188、227は体部から直立・外反するものが多く、184は口縁端部に粘土帯を貼付する。刻目は施文していない。187は口縁部外面下に沈線を１条施文する。190、191は「く」字状に内屈する体部に外反する口縁部が付くもので、191は口縁端部近くの内外面に小さな段を有している。192、193は似た形態を示すが、192は４箇所の低い突起部を有する。194は外反する頸部に直立する口縁部が付くもので、口縁帯に１条のヘラ描き沈線を施文している。196はＦ地点出土４と同じ特徴を有している。183～188はⅡ～Ⅲ期、他はⅠ期の所産である。

大型鉢189は口縁部の形状が不明であるが底径で約32cmを測る。197、199は中型の部類に入る。口縁部形状は尖り気味に納めている。また底部に組織痕が残る例（218）、体部に残る例（213～217）、口縁部付近まで組織痕を残す例（212）もある。組織痕は全て網状の痕跡（図版81－２）を残しており、布状のものは確認されていない。これらの鉢は主たる調理用具であり時期の所属が難しい器種であるが、組織痕を有することからⅠ期前後の時期である。

壺は小型・中型で占められ、口縁部は外反する口唇端部にわずかに粘土帯を貼付して外反・肥厚させるもの（220～226）と、単純に外反させるもの（228～231）の２者が存在する。全体

口縁突帯の有無	口縁刻目の有無	肩部突帯の有無	肩部刻目の有無	施文方法	施文具	角閃石 破片数	角閃石 土器番号（アルファベットは突帯貼付位置を示す）	雲母 破片数	雲母 土器番号	角閃石＋雲母 破片数	角閃石＋雲母 土器番号	藤尾分類
[口縁部突帯による分類]												
有	有	有・？	有・？	刺突	ユビ	7	35A、36A、37A、38A、39A、52A、174A					ⅢA₁（＋Ⅱ₁）
					棒	36	40B、46A、48A、51A、53A、54A、57A、60A、62A、63A 65A、66B、70C、74B、75B、76C、77C、83C、84B、86B 88C、93C、94C、98C、99A、100C、103B、105A、106C 107C、110C、172C、173A、177A、178A	10	43A、44A、45A 64B、82C、87C 89C、90C、92C 96C	2	41A、42A	
					板	3	50A、55A、56B					
					うす板	5	47A、67B、68B、69A、80C	1	71C			
					竹管	1	109C					
				押引	板	12	59A、61A、72C、78C、79C、81C、85C、91C、102C、104B 160B、179A			1	95C	ⅢA₂（＋Ⅱ₂）
					うす板	1	58A					
			無									
		無	有	刺突	棒	1	176A					ⅢC₁
			無									
	無	有	有									
			無									
		無										
無	有	有	有	刺突	棒			1	111			ⅢB₁
			無									
		無・？	有									
			無・？	刺突	棒	3	112、113、114					ⅣB
					うす板	1	73					ⅢB₁かⅥB
	無	有	有	刺突	棒	1	175					ⅢD₁
		無	無									ⅠA・B
[肩部突帯による分類]												
不明	不明	有	有	刺突	ユビ	8	143、144、149、151、157、169、170、180					
					棒	22	108、115、118、123、124、126、127、134、135、136、137 138、139、140、148、150、154、164、165、167、168、171	9	121、125、132、133、147 161、162、163、166	2	120、152	
					うす板	2	122、129					
				押引	板	14	116、119、128、130、131、141、142、145、146、153、155 156、158、159					
			無					2	117、181			

第１表　口縁部・肩部突帯の有無と施文による分類表

			角閃石		雲母		角閃石＋雲母	
			破片数	土器番号	破片数	土器番号	破片数	土器番号
刺突	A	ユビ	7	35、36、37、38、39、52、174				
		棒	16	46、48、51、53、54、57、60、62、63 65、99、105、173、176、177、178	3	43、44、45	2	41、42
		板	2	50、55				
		うす板	2	47、69				
	B	棒	6	40、66、74、75、84、86	1	64		
			1	103				
		板	1	56				
		うす板	2	67、68				
	C	棒	13	70、76、77、83、88、93、94、98、100 106、107、110、172	6	82、87、89 90、92、96		
		うす板	1	80	1	71		
		竹管	1	109				
押引	A	板	2	59、61				
		うす板	2	58、179				
	B	板	2	104、160				
	C	板	8	72、78、79、81、85、91、102、107			1	95

第２表　口縁部突帯の貼付位置と胎土別分類表（数字は挿図中の土器番号に一致）

の形態が不明のため詳細な検討ができないが、礫石遺跡（注４）で検討された壺の属性分析を219について援用すると礫石遺跡Ⅰ期以前に属するものと考えて良い。この219は頸部がほぼ直線的に内傾して立ち上がり、外湾する口縁部が付く。口縁部下に１条の沈線を巡らし、頸部外面には弧状のヘラミガキを施す。肩部は欠損しているが頸部は残存しており、これからすると肩の張った器形を示すようである。また底部の形状も不明であるが293のような平底風の丸底になるものと考えられる。さて、弧状のヘラミガキは類例に乏しいが、長野宮の前遺跡１号墓甕棺（注５）の下甕に使用された大型壺に同手法が採用されている。上甕はⅠ類、供献の甕はⅣＡ$_1$類に属するものである。同巧の甕は39号墓（支石墓）の合せ口甕棺の下甕にも大型壺が採用されており、同時期の所産である。これらの資料は219と並行するものであろう。

本遺跡出土の小型壺については個々の土器の遺存度が低く、分析に耐えうるものでないが、概して古相を示しており、また胎土に雲母を含むものが大勢を占めることから、219を含めてⅡ期を主体としたものであることが首肯される。

高坏（台付鉢）は資料の遺存度が低いが、254・255は脚台部に突帯を有し、施文法は棒状工具による刺突で施文している。253も遺存度が低いが、脚部との接合面で剥離しており、256のような脚が接合するものと思われる。胎土は255・257が角閃石を含むもので、他は雲母に角閃石を含んでいる。いずれもⅡ期に属するものである。

Ａ地点出土土器は少量で、深鉢（１、４～10）、浅鉢（２）、碗（３）、鉢（11）などの器種で構成される。現在までの調査では刻目突帯文土器は出土していない。深鉢１は口唇端部が尖る特徴を持ち、菜畑13層、９～12層の深鉢Ａに類例を認める。碗２は口縁部内面に段を有し、菜畑13層・浅鉢Ｊや黒川洞穴、礫石原遺跡などに類例を見る。11はリボン状突起を有する深鉢で肥賀太郎遺跡（注６）や菜畑13層・深鉢Ｂ、９～12層・鉢Ｄとして残存する。Ⅰ期の所産で

ある。

Ｃ地点では深鉢（１～３）、刻目突帯文の甕（４、９）、壺形土器（６～８）が出土している。深鉢は内外面条痕で仕上げられ、また甕４・９も同様である。４は口縁端部内外面を少し肥厚させ、押引施文を施す。甕ⅢＡ$_2$類。９は肩部の棒状工具による刺突施文で甕ⅢＡ$_1$類またはⅡ$_1$類である。壺は副葬小壺で、６、８は合い似た形状を示す。ともに丹塗りを施す。曲り田（新）相当。７は外面ヘラミガキ、内面は目の細かいササラ状の工具で調整を行う（図版82）。同様の調整痕は甕５の内外面にも残っている。Ⅱ期の所産である。

Ｅ区出土遺物は甕（１～５、８、14、15）、鉢（６）、浅鉢（７）、壺（９、10）、脚台（11～13）がある。甕は全て口縁部破片であるが、内外面に条痕を残し、突帯貼付位置は全てＣで、刻目はユビによる押圧でありⅢＡ$_1$類である。鉢６は外面ヘラミガキ、内面条痕の後丁寧にナデて仕上げ、口縁端部は中凹状にヘラ状工具で仕上げる。精製された土器である。浅鉢と思われる７は精製土器で外面ヘラミガキ、内面ササラ状工具で強くナデて仕上げ、ミガキのように平滑である。６、７は礫石原式相当であろう。壺片と思われる９、10は外面ヘラミガキで、丹塗りを施す。Ⅰ・Ⅱ期の所産である。

Ｆ地点出土土器はＡ地点出土土器と似通っている。深鉢（１、２）、鉢（３～６）、脚台（８）からなり、Ａ地点同様刻目突帯文土器の出土を見ない。深鉢１は口唇内側を鋭角に、外側を丸く納めた口縁帯に３条のヘラ描き沈線を巡らすもので、施文後ナデ調整を行う。このため沈線の一部がナデにより潰されて消えかかっているところが見られる。口縁帯下の体部との境界はササラ状の工具で強くケズるようにして口縁帯を作出している。２は深鉢胴部片であるが剥落が激しく詳細不明である。鉢３は内湾する体部から「く」字状に外傾する口縁部が付く。５、６も同様の段を有する。４は体部から緩く外反する口縁部を有するもので端部は丸く納める。以上は礫石原式相当で、Ⅰ期の所産である。

以上各地点の出土土器を検討したが、本遺跡の時期区分としては記述したごとくⅠ～Ⅲ期に区分できる。Ⅰ期は礫石原式・黒川式併行、Ⅱ期が藤尾編年Ⅰ期、Ⅲ期が藤尾Ⅱ期に相当する。しかし、Ⅱ期、Ⅲ期の時間的関係は近接しているようであり、この点は施文工具のあり方から首肯できよう。

では本遺跡の主体を占める突帯文期であるⅡ期＋Ⅲ期の器種組成を見てみたい。個体数を確認するため口縁部を中心に算定（135点、支石墓出土分を除く。）すると、深鉢23点（17％、算定総数135点に対する百分比）、甕78点（57.8％）、鉢11点（8.1％）、浅鉢７点（5.2％）、壺13点（9.6％）、高坏３点（2.2％）となる。煮沸用具である深鉢と甕で74.8％、調理・供献用具である鉢・浅鉢・高坏が15.5％、貯蔵用具が9.6％となり、煮沸・調理用具で90％を占めている。この比率は有田七田前遺跡第Ⅲ層（注７）の構成比率と近似し、宇木汲田遺跡Ⅸ層（注８）よりはるかに高率となっている。この器種構成の比率からすると、本遺跡は居住域としてⅠ～Ⅱ期にかけて利・活用され、その後Ⅱ期に埋葬域としての土地利用がなされたことが窺われる。本遺跡の土地利用については、当初埋葬域としての利・活用を想定していたが、土器・石器等の

分析により長時間かつ多目的に利用されたことが判明した。また、同時期の遺跡が山麓の峰ノ原遺跡（注９）に存在しており、より広域に、かつ総合的に分析を進めることが今後の課題である。

注１　藤尾慎一郎「西北九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 1990
注２　唐津市教育委員会『菜畑』1982
注３　前原市教育委員会「高田小生水遺跡」『前原市文化財調査報告書』第76集 2001
注４　百人委員会「礫石原遺跡」『百人委員会埋蔵文化財報告』第７集 1977
　　長崎県教育委員会「礫石原遺跡」『長崎県文化財調査報告書』第100集 1991
注５　前原町教育委員会「長野川流域の遺跡群　Ⅰ」『前原町文化財調査報告書』第31集 1989
注６　長崎県教育委員会「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査報告書』第97集 1990
注７　藤尾慎一郎編「福岡市早良区有田七田前遺跡1985年度発掘調査」『九州文化史研究紀要』第32号 1987
注８　横山浩一・藤尾慎一郎「宇木汲田遺跡1984年度出土の土器について―刻目突帯文土器を中心に―」『九州文化史研究所紀要』第31号 1986
注９　長崎県教育委員会『諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集　図録編』1975

第３節　石器について

本遺跡で出土した石器については第５章第４節第２項でも触れているが、石器組成の比率による周辺遺跡との比較においても単なる埋葬域でのものでなく、一定期間の居住或いは生産を考えさせる数値となっている。そこで出土した石器の中で生業に係わる石器である石鏃、石斧などについて述べてみたい。

―1．石鏃について

（１）13・14タイプ石鏃

８次にわたる調査で調査地点が特定出来ないもの及び欠損等によって分類できないものを除く石鏃の出土総数は249点である。狩猟具である石鏃は遺跡において層位的に原位置を保って出土したとしても年代的には不安定な要素をもつものであるが、今回の調査で出土した石鏃の中でタイプ13Ａ、13Ｂ、13Ｅ、14Ｂに分類した石鏃は本遺跡周辺の遺跡では出土が認められないタイプのものであり、その機能と年代的な視点で論議されてきた石器である（注１）。

249点のうち13・14タイプとして分類したものは13Ａ５点、13Ｂ９点、13Ｅ１点、14Ｂ４点の合計19点であり、石鏃の出土点数と出土地点については調査精度が一つの要件であることは否めないが、出土した地点は第28・29表のとおりであって全てＤ地点である（＊印は図化したもの）。今回の調査によって出土したこれらのタイプの石鏃については14Ｂをサイドブレイドとして報告されている例が多く、先端に小さな尖鋭部を作出した13Ａ・13Ｂ・13Ｅタイプは、半月形のサイドブレイド或いは縄文晩期の幅広の石鏃として報告されている。風観岳支石墓群の調査では先に述べたようにＤ地点に集中しており、突帯文土器と共に出土し、出土した数も比較的多いので突帯文土器の時期に伴う石器と考えている。13タイプは先端に小さく尖鋭部を

作出するのでその形態からみて用途は石鏃であろうか。14タイプはサイドブレイドとして組み合わせ道具の刃を想定してみたが、その用途については、従来言われてきた海岸遺跡に多く出土し、漁労具を想定することに対し、遺跡の立地環境などによる他の用途を挙げるまでに至らなかった。

（２）層位的にみた石鏃の出土状況

Ｄ地点３－６・７－18・７－９トレンチ（第４図・第５図・第40図）について遺物の出土状況に基づいて若干の考察を加えてみた。今回の調査で設けた調査区のうち土層が比較的に安定し、出土した土器には棒状の工具で刻み目を施した貼付け突帯文土器があり、また土器のなかには若干ながら接合関係も認められ、下位の土層の堆積は短期間であることを示唆しているところから３－６・７－18・７－９トレンチから出土した石鏃について考察を加えた。

３カ所のトレンチから出土し、タイプを類別できた石鏃の総数は25点であり、トレンチ別にみると、３－６で５点、７－18で11点、７－９で９点出土している。そのうち７－９トレンチの04Ａタイプ１点は、タイプは類別できたが表土からの出土である。

出土深度の投影には各トレンチに共通した南北の土層図を用いているが、遺物の深度はほぼ２層茶褐色に包含する状態を示していた。石鏃のタイプ別による出土数のうち、10Ａタイプ３点、10Ｂタイプが４点と32％を占め、形状は有肩型を呈し、縄文期打製石鏃の形態を示すものである（第69図54・56・57）。これらの石鏃の中には、本調査で出土した石鏃にみられる素材面を残すという特徴があり、この項のはじめに述べた土器の出土状況とあわせて考えると、３カ所のトレンチで出土した10Ａ・10Ｂタイプをはじめとする石鏃は時期的には突帯文土器の時期に属し、支石墓を営む新しい文化が展開する中で、縄文期の伝統的な形態の打製石鏃が狩猟具として普遍的に使用されていたことを示すものであろう。

ー２．石斧について

本遺跡の調査で出土した石斧は表面採集によるものを含めて総数22点を数え、その内訳は打製石斧17点、磨製石斧５点である。

打製石斧は素材に遺跡周辺に産出する輝石安山岩を用いている。石質は脆弱で加工は容易であったが使用による損失は多かったものと思われる。しかしながらこの種の素材は遺跡周辺で豊富に入手でき、製品の補充が容易なために選択されたものと考えている。これらの打製石斧の機能については土掘具などが考えられるが、石器表面の風化の度合いが強く、使用痕などによる考察をできなかった。

磨製石斧は、表面採集による蛇紋岩製の縄文期伐採斧１点（第76図181）と風化の進んだ輝石安山岩製のもの１点（第76図184）を除くと、38号支石墓（ＳＢ４）からが副葬の状態で出土した硬質砂岩を素材にした小型の伐採斧（第76図180）１点、及び硬質砂岩、頁岩を用いた磨製石斧の基部または刃部の破片（第76図182・183）２点である。県内に西彼杵半島、野母半島などの変成岩分布地帯があり、石斧の素材となる蛇紋岩、緑泥片岩を産出するにもかかわら

ず本遺跡で出土した磨製石斧の素材に蛇紋岩、緑泥片岩を選択する割合が低いことが認められる。これは本遺跡のみにみられる偶発的な事象であるかもしれないが、伐採石斧の厚刃化と重量化（注２）との関連を今後の検討課題としたい。

ー３．特殊な石器について

風観岳支石墓群の調査によって出土した石器の中に黒曜石の小礫を素材に用い、打点を残さず、剥離面は全面がポジティブの面を残していて一見タマネギ状を呈するものがあって、表土からの出土したものを含め104点を数える

出土状況については、８次にわたって行った調査で出土した石器について全体の再検討も行ったが、調査精度を考慮にいれてもＤ地区の３次～８次トレンチの縄文晩期の包含層から他の遺物とともに出土し、Ｄ地点の埋葬遺構周辺に集中していることが特徴として捉えられた。３次調査によるもの57点、５次調査によるもの１点、６次調査によるもの３点、７次調査によるもの15点、８次調査によるもの３点、表土中にあったもの24点、表面採集１点で、そのうち接合したものが４例ある。石器をあらためて観察してみると小礫にかなりの力で一挙に加撃を加え、破砕に近い状態で作出されたことが考えられる。従って剥片も明確な打点を残さず、剥離面は打裂の凹凸が顕著に残っている。これは接合資料からも看取できるのであるが、生じた剥片は小型で不整形なもので、目的的な剥片としては捉え難いものである。しかしながら何らかの意図があっての所産ではないかと考え、類例を求めて九州各県を始めとする関係報告書及び図書を検討したが寡聞にして例を見出せなかった。従って残核様のものを石器として意図したのか、チップ様剥片を石器の素材としたのか、今回は解明することができず、今後の課題として問題を提起するに留めることとなった。

注１　長崎県教育委員会「ケイマンゴ―遺跡」『長崎県文化財調査報告書』第52集 1980
注２　下條信行「北東アジアにおける伐採石斧の展開」『韓半島考古学論叢』2002

第４節　石列、ピット群、支石墓石材供給地について

ー１．石列

５次の５トレンチで確認された石列について記しておきたい。遺構は既述のごとく玄武岩板状石を平積みしたもので、列状をなし一定の区画を見せる遺存状況を示してはいない。しかし、相対する西側の地山切込み部との関連が想定され、また両遺構の間には柱穴様ピットが存在し、墓域を区画する遺構か、あるいは居住関係の遺構であるのか不明であるが、埋土中の土器は突帯文期の土器のみで他の時期のものを含んでいない。７－９トレンチ、７－18トレンチの段差状遺構に連接する可能性もあり、またⅡ期の所産であることから、支石墓との関連も想定されるため今後の調査課題としておきたい。なお形態は異なるものの墓域を区画するものとして長野宮の前遺跡（注１）第39号墓がある。この39号墓は石囲状支石をもつ支石墓で、内部主体は２段掘りの土壙を採用し、甕棺を埋置していた。周囲には複数の支石墓が存在したと想定され、